く、すれちがふ車も勘なく土埃も立たないで、画にも写真にも無いやうな雨の田舎が見られます。あの辺は沼や大川があつて変つた地形ですが、この交通機関が出来た御蔭に、可なり広い区域を泊らずに見物が出来ます。そんなにまでしなくともと、宿屋の人たちは思ふでせうが、これにも相応の理由は有るのです。以前は琴平などにも田舎の人が多く行き、町から来た者でも一日中寂しい処をあるいて来るのだから、幾ら旅館が賑やかでも困らなかつたのですが、今日の旅人の一部分は繁華に飽き、羨衆の酔を醒ましに行くのです。そこが都会の小さな模倣であつたり、もしくは働いて居る日以上の混雑であつたりしては、酒と唄とで紛らさうとする連中以外の者は、却つて外に寝たために草臥れて還る他はありません。だからめい〳〵が無理な旅程を組んで、成るべくは夜は自分の寝床へ戻つて来ようとするのです。優れた風景と名勝とを幾つも持つて居る讃岐のやうな土地では、それを遠近の旅客に味はしめる為に、特に落付いた寝心地のよい宿屋の一隅を用意して置くのが一大慈悲心で、それを怠るといつまでも、酔つてわめいて何を見て来たか覚えて居らぬ者ばかりが、国立公園を渡りあるく様な結果になるかも知れません。さうだとするとまづ野原のまん中も同じことですね。

五足の靴

與謝野鉄幹
北原白秋
木下杢太郎
吉井勇
平野萬里

明治四十年八月七日

五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た。五個の人間は皆ふわふわとして落着かぬ仲間だ。彼等は面の皮も厚く無い、大胆でも無い。而も彼等をして少しく重味あり大量あるが如く見せしむるものは、その厚皮な、形の大きい五足の靴の御蔭だ。

(一) 厳島 (八月七日)

安芸の宮島駅へ着いたのは午前四時半、まだ日が上らぬ。直ぐ船の乗場へ出る。水盤のやうに平かな海峡だ、紺青色の島に藍色の霧が流れる。空にも水にも流れる下ノ関丸は五六十噸許の綺麗な汽船だ。吼えるやうに汽笛を鳴らして錨を抜く。十五分間で厳島へ着いた。まだ静かに眠つて居る山裾に

島の人は既に起きて居る。霧に濡れた朱塗の大廊下を履のまで歩むのは好い心持だ。潮の退いて居るのは少し口惜しい。拝殿に立塞つて拝む。赤地の錦の旗をつけた矛や、箙にさした矢や、大弓やが両側に飾つてある。御簾は新しいのが明るく、灯籠は物寂びたのが奥ゆかしい。誰かが平家の話を仕出す、重盛が参籠したのはまだ三日以前の事に過ぎぬ、此の三日の間に平家も亡び源氏も亡び、北条、足利、徳川も亡び、而して僕等が今日こゝに来たのだと思ふ。社殿の後ろから紅葉谷に上る。霧は益々深い。岩愈の二階座敷は戸を明け放して、蚊帳越しにまだ幾組かの避暑客が寝て居る。蚊帳の萌黄色が山の朝景色に調和して涼しい。

塔を右に見ながら千畳閣に上る、豊公が朝鮮征伐の軍評定所として急速に建てさせたものだ。天井板を張らぬ粗雑な、而も偉大な丸木作りの建築は豊公の襟度を察ばしめる。履のまゝ上る。椽の四方には老婆が太閤力餅を売つて居る。呉座の上に横に成つて餅を食ひ番茶を飲む。「婆さん、この柱の杓子は何う云ふ訳だい」と一人が聞く。柱と云ふ柱には大小無数の杓子を掲げて人の名を記してある。「杓子はな、あんたはん、支那の軍に、支那をめしとるちふてな、あんたはん、夫から露西亜との戦争にも露西亜をめしとるちふてな、あんたはん。」この「めしとる」と云ふ洒落は、一寸解しかねて二三度聞き直した者もあつた。日清・日露両戦争に出征兵士や其父兄等が戦勝を祈願して上げたものだ。「めしとる」と云ふ百姓的の洒落が天真爛漫で面白い、又この荒木造りの大建築にも適して居る。

船の乗場へ引返へす路に、「ふろ」と大書した屋根看板が目につく。入口には「きよめ湯」とある。神社三拝の後に入浴するのは順序を誤つて居るが、氣車中の汗を流さうと飛び込む、湯は路地の奥だ、路地の中程には赤い霞幕が引いてある。寄席式だ。番台の下には一人の娘が腰を掛けて居る。今湯から上つた船頭らしい男が「どうして手を怪我したんだ。」と聞くと「階子段から落ちてな。」「よう落ちるな、三度目ぢや無いか。」なぞと話し合ふ。

(二) 赤間が関 (八月八日)

海に沿ふた馬関の町は今水瓜と氷水の世界だ。我等は其の匂を嗅ぎながら狭い路を波止場の方へ出た。倉庫の前には大勢の荷揚人足が働いて居る。「稼いで彼の子に遣らざあなるまい」と歌ふでも無く唸るでも無く、こんな声が聞える。干魚の匂が日ざかりの空気に蒸される。

亀山の宮の石階を上て社前の茶店に憩ふ。直ぐ下は海だ。対岸の門司にはセメント製造所の徳利竈から吐き出す灰白色の煙が、東へ東へと延びて街市の半を掩ふ。其間から九州の山脈や、赤練瓦の壁が隠見する、門司は石炭の集散地だけに、そこの市民は石炭を食物にして石炭の煙を吐き出して居るやうに思ふ。海には四五千噸の滊船が二三隻われは顔に浮んで、

その周囲には幾十艘の小蒸溟が散在して居る。馬関門司の連絡船が客を一杯載せて往復する。其外に白い小蒸溟や、黄色い、黒い、青い　色々の小蒸溟が、幾艘となく何処からか現れて何処へとも無く消えて行く。帆前船は都会の女の如く、和船は田舎の百姓の如くに往来する。「船は皆活きて居るね」と一人が云ふ「うむ船に比べると人は丸で虫だ。」「見た所船ばかりぢや無い、万物は皆活きよ活きよと叫んでるぢや無いか。」「此処は歴史的の地でありながら全く歴史を撥無して現在の活動のみがある」などと語る。茶店の女が跣足のまゝで酌んで出す番茶が却々うまい。

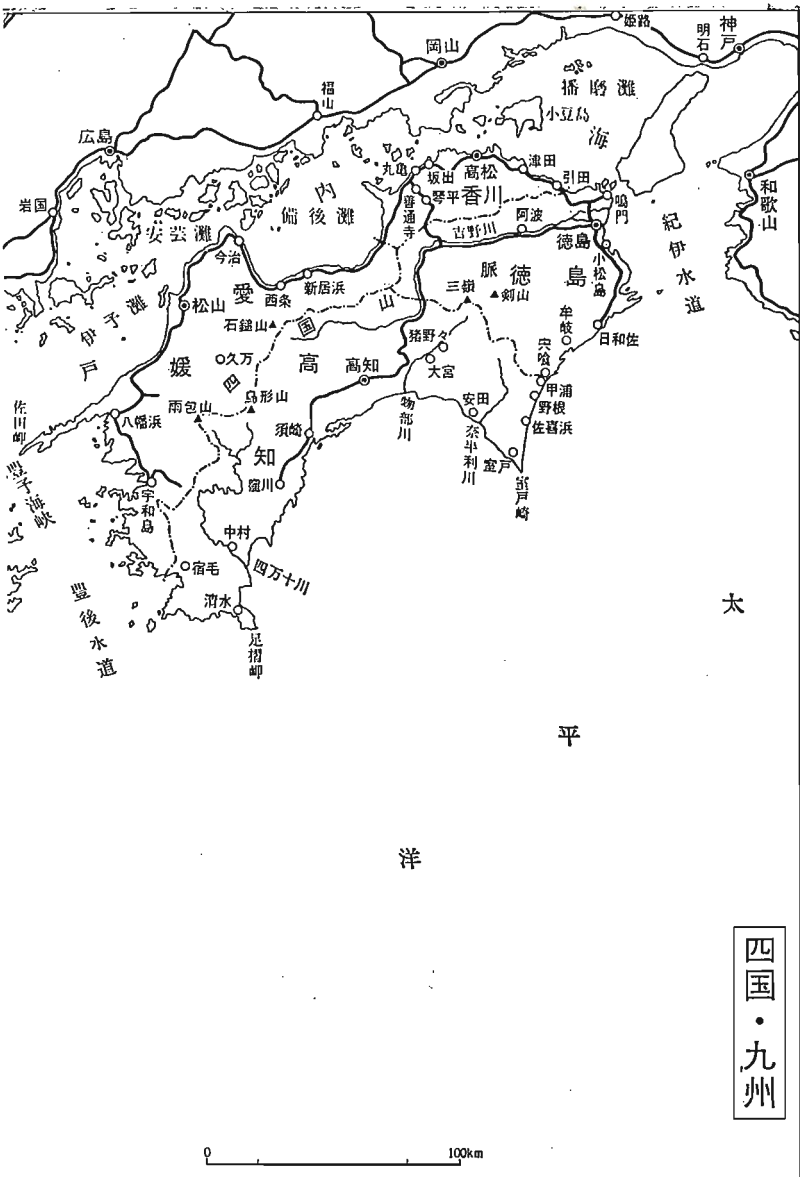
壇の浦町を過ぎて平家蟹を見た。B生は歩き乍ら一詩を作る。

うしなはれたるそのかみの
栄華や如何に。いたづらに
歯をくひしばる平家蟹」
腕の鋏刀、色じろの
甲良に刻む、人の面
無念のおもひ、平家蟹」
氏高うして蟹となる
惨たるものの運命を
咀はざらむや、平家蟹」
源氏の末よ、人間よ、
わが一族ぞ海に生く
今こそしのべ、平家蟹」
海にしあれば、人の世の
うつりかはりを知らずして、
ひたすら怒る平家蟹」
ひとたび立たば、天が下
清盛の世にかへすべき
未来を想ふ、平家蟹。

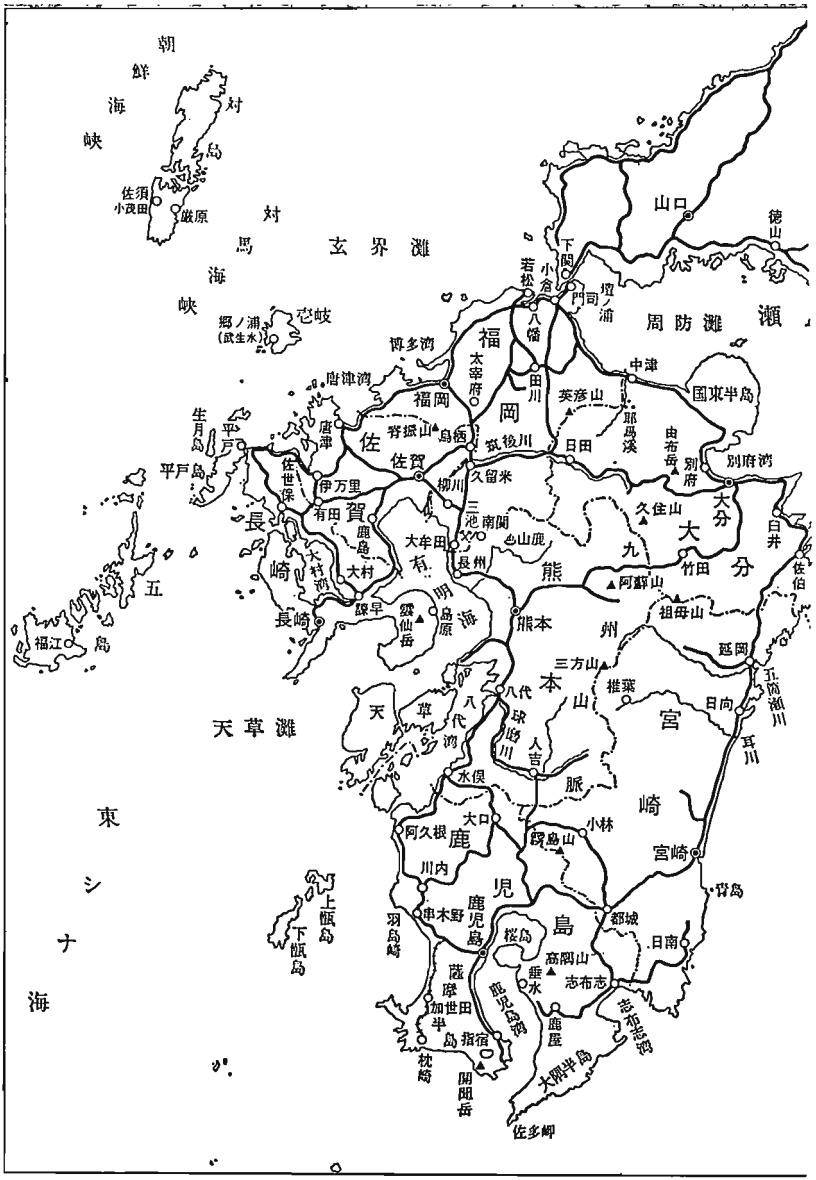
旅館川卯に帰る、此処の豪傑主婦も、その姉の茶勘の婆さんもまだ却々達者だ。女中の話に由ると、門司で打つて居る梅幸羽左衛門の劇は評判が佳くない。我等は急に江戸ッ児となりて憤慨する。

(三)　福　岡　(八月九日)

福岡県文学会が我等一行の為に催された。午後十時会散じて後、一艘の舟を倩うて博多の町に帰る。「西公園吉原」と書いた提灯に送られて細坂路を下ると、直ぐもう海の香ひがさつと聞えて、懶げな波の響が足もとにする。暗い船の中に二十人の人が恰も崩れたゴーヂックとも云ふべきさまに控へて居る。亡霊の夜遊とも見れば見える。「海賊船の船出だ」と叫ぶ者もあつたが、此の生白い連中で海賊は覚束なからう。船は那珂川口に向つて進む。九州日報社の中田氏髪を長く肩に垂れて、顔は童女のやうに紅く優しい。美い声で此地の俗謡数篇を歌ふ。「ねんねしなされ、夜はまだ明けぬ、明けれ


姫路
明石
神戸
岡山
播磨灘
小豆島
海
福山
広島
岩国
安芸灘
内
備後灘
丸亀
坂出
琴平
高松
香川
津田
引田
鳴門
善通寺
吉野川
阿波
徳島
小松島
和歌山
紀伊水道
今治
新居浜
西条
愛
媛
松山
石鎚山
伊予灘
瀬戸
内海
三嶺
剣山
徳島脈
牟岐
日和佐
宍喰
久万
四国山脈
高知
猪野々
大宮
甲浦
野根
佐喜浜
佐田岬
八幡浜
雨包山
形山
須崎
物部川
安田
奈半利川
室戸
室戸崎
宇和島
知
窪川
中村
宿毛
四万十川
清水
足摺岬
豊予海峡
豊後水道
太
平
洋
0
100km

四国・九州


朝鮮海峡
対馬
佐須小茂田
厳原
対馬海峡
壱岐
郷ノ浦(武生水)
玄界灘
唐津湾
博多湾
福岡
太宰府
福岡
若松
小倉
下関
門司
関門海峡
八幡
田川
山口
徳山
瀬戸内海
周防灘
中津
国東半島
英彦山
耶馬渓
由布岳
別府
別府湾
日田
筑後川
久留米
脊振山
佐賀
唐津
佐世保
平戸
平戸島
生月島
伊万里
有田
佐賀
長崎
大村湾
大村
鹿島
大牟田
三池
南関
柳川
長州
有明海
熊本
阿蘇山
久住山
大分
竹田
臼杵
佐伯
祖母山
延岡
五島
福江島
長崎
雲仙岳
島原
早岳
天草灘
天草
八代
八代海
球磨川
人吉
水俣
三方山
椎葉
日向
五ヶ瀬川
耳川
宮崎
小林
霧島山
宮崎
都城
日南
青島
大口
阿久根
川内
鹿児島
鹿児島湾
桜島
高隅山
垂水
志布志
志布志湾
大隅半島
鹿屋
薩摩半島
加世田
指宿
枕崎
開聞岳
佐多岬
羽島崎
串木野
上甑島
下甑島
東シナ海

や御殿の鐘が鳴る」は子守唄だ。「酒は飲め飲め、飲むなれば日の本一のこの槍を、飲みとる程に飲むならば、これぞまことの黒田武士」は福岡の藩士の「将進酒」だ。これは黒田家の武士母里但馬が福島正則の陣に使者となつて、正則と酒戦の賭に正則秘蔵の名槍を得た故事に基づく歌だ。空には天の川が白い、海には暗い波に折々夜光虫と海月とが光る。舟中の清話は尽くることを知らぬ。就中天野、河内、中田三氏が博多の風俗を説く所最も興が深い。博多なるかな、博多なるかな、博多は古来生々主義の地だ、歴史や道徳宗教は博多人の眼中に無い、渠等は異種族を侵掠することを喜んだ、「八幡船」は此地から盛に錨を抜いた、倭寇の根拠地は博多であつた。秀吉は之を奨励したが、家康に至つて之を制することが、度を越えた。殊に藩主黒田氏は小心にして鶏の如く隼の如き博多人の翼を矯めたることが甚しい。此に不平憤懣の気は逆つて博多人は一途にひねくれた快楽主義の人と成つた。町毎に催す「にわか狂言」は多く外来人たる福岡藩士の失策を脚色した。一年一度の「どんたく」には町民互に「祝ふた〳〵」と呼ばはつて飲み廻る。各戸何れも酒と肴とを陣ねて之を迎へる。又「放生会」には、千代の松原に幕を張つて宴飲し、良家の女子皆綺羅を着飾つて乞食の真似をして遊ぶ。博多の俗謡に云く「博多の者は横道者、青竹割つて鼻ぶ禅かいた」以てその元気の盛んな、傍若無人の状が窺はれる。福岡と博多とは川一つ隔てた丈だが今猶言語風俗を異にして居るさうだ。博多の言語には面白いものが多い。「ほう北国」「はッば平」は共に無茶苦茶と云ふ意味の語だ。外国語の影響には小児に「御礼を云へ」と勧める時に「アーメンクーしなしやい」と云ふ。馬鹿と言ふ語の代りにバーセキと云ふ朝鮮語が普通行はれる。

中島の川丈と云ふ旅館に泊つた。旅館と、温泉宿と、寄席と、氷店と、水上花火を装置した納涼店とを兼ねた家だ。川に臨んだ二階の戸を明放した儘で寝かせて呉れた。

(四) 砂丘 (八月十日)

朝、氣車は千代の松原を走る。松緑にして砂白き古来の絶景である。此中に筥崎八幡香椎の宮がある。潮風の荒きに圧され、松は皆低く地を這ふ、砂は黄味を帯びた白色の石英質である。投げられた松の影が虎斑を作る中を、めぐるほしく走つてゆく。向ふに日を受けた日蹠の銅像の大頭がきらきらと輝き、博多湾を睨んで居る。その昔数十万の蒙古は博多湾に上陸して幅四里の地を占領したさうだ。千代の松原を掘り返したら蒙古の足跡が頭れるかも知れんと思ふと、当時の光景が浮んで来る。勝ち誇つた蒙古は我が同胞を惨たらしい目に逢はせた、日本の歴史あつて以来最も悲惨なる光景の一つである。美しい松原の松の幹に赤い血が点々と着いて居る。また博多は倭寇の根拠地である。今度は今の光景を逆にしてゐる、殺されたものの子孫が殺したものの子孫を殺すのだか

ら気持がいい。豪奢を極めた倭寇の史蹟は極めて気持がいい。「黄金ならべて女郎買ふ時は諸国諸大名も及びやせぬ」と柳町の遊び屋に倭寇の諸豪傑が歌つたさうだ。

今日、日蓮が大頭を光らした松原の上に立つてゐる間は先づ筑紫は無事である。奈多に下りる。一帯の砂地で、甘藷の蔓が乾いた砂の上に這つて居る許り、残る凡ては松の林である。この辺から「海の中道」が初まる。玄海灘と博多湾とを界し、長さ三里に亙る砂丘の連続である。丘に登つて洋々たる玄海灘を見る。降つて磯を歩く。風なければ晴れたる海は静かである。水の色は空に映り、空の色は水に映る紺青の世界の一方を限るは卵の如く白い砂の壁である。自然は意匠に富む、砂の壁は限りなく襞を作り、長く続いて厭くことを知らぬ。白い砂が白く光つて人の眼を眩す。暑さは熱るやうである。ゑぐれた壁に蔭を求行て衣を脱し、天野、河内、中田三氏と我等五人、八人の男は海に跳び込む。海は遠浅だが同じ砂で底が成り立つて居る。その故に清く澄んでゐる。他の人は居ない。這ひ上つて砂の上に転がるは芋の様である。手と足とを使つて砂丘に攀づるは猿のやうである。登つた壁をするすると滑り下る気持は何とも言へぬ。H君の発見した小児らしい遊戯が八人の男を支配し、交る〳〵登つては滑り下る。砂丘は八人の男と俗界との交渉を絶つた。ノルマン人が英吉利西に近づくと向ふに雪を欺く白堊の壁が見えた。開いた蝙蝠傘を逆に砂に突き立て、その中に身の廻り一切を入れ、裸で徘徊する八人の男はどうも漂着したものらしく思はれた。ステイヴンソンの「砂の上の一つ家」を思ひ出した。帽子が風に逐はれてころ〳〵と砂の上を転がつてゆく、海に落ちさうで落ちぬ、捕まりさうで捕まらぬ所が面白い。砂の上に大きな足跡がある。蒙古の足跡かとも思はれる。風がある日は大分浪が荒いさうだ。も少し先へゆくと幅が狭まつて右に澎湃たる玄海の怒濤を控へ、左に博多湾の平静な波を見るべしと言ふ。ここでかうやつて暫く遊び、遊び労れて、熱く焼けた砂の上を再びとぼとぼと帰つて行く。

(五) 潮　(八月十一日)

筑後の柳河まで来た。海を控へて水田と川との多い土地だ。北原氏に宿る。即ち我等が一人なるH生の家だ。H生の一家は東京から客人を連れて長男が帰ると云ふので、室内の装飾やら、寝具の新調やら、非常の騒ぎをして歓待の準備が頗る整頓して居る。それで我等に面会のため他郡から出掛けて泊り込む者もあるので、台所では祭礼の日のやうな混雑だ。裏の幾十間と続く酒倉では、多くの倉男が眠むたげな調子で唄ひながら、渋を採るため青柿を呑気に臼で舂く宛ら母屋の騒ぎとは別世界だ。

次の日酒倉に入つて色々酒造の説明を倉男から聴く。二十石入りの九尺桶が封をした儘薄暗い中に並んだ光景は壮大だ。桶と桶とが何か頻に黄金色の呼吸で私語く。見慣れぬ浴衣着

の連中が木履を穿いて闖入したのを桶も驚いたのだ。北原氏は筑後で屈指の酒造家だ、造る酒は種々あるが、就中「潮」と銘打つ酒は九州全体に名高い。県下八女郡の米の精良なるを択んで、之を四十度も春き白げた上で製したものが此「潮」だ。我等は毎食倉から出したての「潮」を飲まされる。而も此の醇酒は我等下戸党も甚だ気に入つた。あゝ此様な酒を水と酒精との混合酒に舌鼓打つ東京人に飲ませて遣りたい。主翁が大幅の絹を展べて、何かと乞はるる儘に名「潮」の歌を書く。

君が家の豊神酒のめば男の子われ目にこそ浮べ万里のうしほ

火のうしほ世をも人をも焼かむとす恋にさも似る君が家の酒

豊御酒に心うしほす恋の舟よろこびの舟帆ならべ来る

筑紫の海国いと若し青い潮こをろこをろに鳴りわたるかな

玄海の早潮に似る酒わきぬ君が倉なる一百の桶

酔中興じて更に数首の歌を得た。

遠人よさめたる恋のよみがへる消息としもこれを見給へ

いと近き心にませどいと遠し君を枕くべきはかりごと無し

髪なびくこのとき千筋すべて鳴るわれはこのとき千人を思ふ

早鞆の瀬の西に暮るひんがしは遠しや君と日のこもる方

いにしへの流されびとの心もて筑紫のはてに君をこそ思へ

君は誰そうらわかき人われ知りぬ君が歌より出でてこし人

波に聞く松かぜに聞く遠妻やけだし筑紫のわが旅に泣く

(六) 雨の日 (八月十二日)

雨を犯して佐賀へ向ふ、枯れ果てゝ礎のみ残る城の趾は到る処にある。到る処の城趾は多少の歴史と多少の出来事とを持つて居るだらう。一々聞かば面白い事もあらうが、だうも大同小異の御家騒動を聯想させて困る。御家騒動などは聞きたくない。徳川時代の歴史には型がある、気持のいい奔放な所がない、従つて想像を働かせる余地に乏しい。独り天草が異彩を放つ位なものである。それよりその死んだ城の濠を青青と掩ふてゐる蓮は遙かに気持がいい。青い地に白い模様が浮き出してぶんと弱い芳しい香がする。真直な水色の絲が蓮の葉に降つてささと鳴る。雨は灰色の空と緑の地とを連ね窺ひ難き天上の秘密を洩す。蓮の花の快きを通りすぎると町つづきとなる。太く古い町である。軒は歪む、壁は崩れる、腐つた家屋には苔が植ゑてある。幾百年の昔建てた祖先の位牌の前で子は孫を生む、老爺は死ぬ。その鎖をたどると少しづつ違つて而も何処か似て居る顔がずらッと並ぶ。天下に事な

し、自然主義が流行らうが、象徴主義が何うあらうが毫も関らん所が面白い。先祖代々至極健全に日を暮してゐるのだ。健全を喜ぶ人は田舎に住むべし、田舎には到る所に健全が鉢合せをして居る。加ふるに大方は裸である。大人は僅に一筋の布を繦ふ、小供は大ほきな腹を出してひよつくり立つてゐる。九州一円夏は裸でさうだ。裸の民は太古の民である。東京には新築の家が多い、且つ新木の色をその儘で置くから晴天の様だ。京都へ来ると新築の家の少ないのに、然も渋い色が塗つてあるから曇天の様だ。田舎の衰へた町は家全体が泥と同化して居る、夕暮の色である町を外づれると水国に入る、行く所として川の無い所はない。皆灌漑の用を為すべき緩く流るゝ平野の小川である。台湾藻と称する河骨に似た藻が所せまく繁つて、すつくと咲いた紫の花が小女の様に美しい。藻なき所には蜘蛛の様な四手網が張られてある。暫くして筑後川に達した。雨は愈降る。

濁れる河を渡ると佐賀迄鉄道馬車がある。乗る。よく見ると品川と新橋との間を通つてよく脱線したそれの御古であつた。紋章がその儘残つて居る。L生が学校の行き返りに乗つた馬車である。

思ひきや、筑紫のはてに
品川の馬車を見むとは

旧知に会ふ感がした。馬も同じ馬かも知れぬ。ひどく飽い。二時佐賀着、佐賀の諸君と佐賀城趾を一周し、途に新刊二三種を購ふ。Hは「早稲田文学」を読み、満座哄笑の内に作れる歌。

さみしい、さみしい晩でした、
秋山君がやつて来た、
君も知つてるだらう、あの
妙にさびしい……信州の
雑木林に水ぐるま
いつか話の人生の、
暗い愁に沈んだが、
寂寞、荒涼、そば畑、
四五年前の追懐に、
ふけつた、泣いた、あこがれた、
さて夜がふけた、鳴りわたる、
音は法華の題目か、
いな、いな、あれは自然派の
早稲田太鼓を知らないか、
でかだん、でかだん

(七) 領巾振山 (八月十三日)

唐津近松寺を出でて鉄道馬車に乗る。正面を見て来た来たといふと中途で馬を外した、何事ならむと思へば遙か向ふの方から煙を吐いて来るものがある。今機関車が来るのださうだ。紫の烟をぱつぱつと断続的に吐きながらがたびしやとや

ツて来たのを見るとべらべらの鉄の函だ、極くプリミチーヴな玩具の様な石油機関車である。機関車が止まると五六人で客車を押して結び付ける。ぼーと一時に濛々たる烟を上げて車が動き出す、その前にぶるぶると馬の様に震へたには一同舌を巻いて驚いた。客車に向へる薄い板の壁に穴が明いてる。化物の口である。三人の火夫が面白がつて石油をたく、その香が遠慮なく客車を見舞ふ。美しい虹の松原を珍しい汚い黒い動物が息ざし荒く腹の中に人間を数十人容れて走つてゆくのである。二軒茶屋で降りる。列車も暫時休憩する、手樋の水を逆にして熱く焼けた釜の上へぶちまけるとじゆうと音がして白煙が立ち登る、烟突の中へまで打つた、そのプリミチーヴなこと驚くべきものがある。茶屋で上衣を脱ぎ、案内者を雇ふ。松原を突切ると領巾振山が見える。左程高くはない平い山である。天平の頃山上憶良が肥前の国司として不平で堪らず、この辺をぶらぶら歩いたのだと思ふと非常に面白い。迂廻して山の背面から登る。午後四時頃の日が斜めにかんと照りつける。喘ぎ〳〵急阪を登ること暫くして顧れば眼界頓に開け松浦川の流が絹の様に光る。前には領巾振山が緑の肌に衣も掩はず横はり伏す。最も左峰の山頂に松が見える。そこで佐用姫が領巾を振つたのである。まだまだ高い。少憩して再び登る。薄紫の撫子がすくすく咲いてゐてそのかみの美はしき少女を忍べといふ。優しいことである。男連れなれど趣味を解すと自ら思へる者の一行である。各一茎を摘む。うねうねした踏分道は容易に尽きぬ。徒に仰いで頂上の松を望む男は何れも息をはづませて居る。よくこんな山へ女の身で登つたものだ。恋するものは労力を味ふ暇がない。清水あつて草の間に湧く、掬べば濁れど冷い。喉渇けば交る〳〵辛じて手にすくつて飲む。有るか無きかの泉も頓に元気を回復させるものである。憶良がこの山に登つた時この泉を掬んだらうと思ふ。眼を放てばそこらあたりに紅の百合が火の様に咲いてゐる。恋に燃ゆる佐用姫の心である。女郎花がある、男郎花がある、鈴蘭がある、昔の人を慰むべく咲いて居る、都の人に送らうと摘んで美しい花環を作る。登りつめると池がある。頂きの端、老いたる松の唯一本立てる下に腰打ち下ろして四方を眺む、日はまだ高い、白い帆を下げた狭手彦の船が次第に遠ざかる、麾けども帰らぬ、女は声を限りに「我が狭手彦」と呼ぶ、白い帆が微かに震ふ、女は領巾を外してひらひらと舞はした。緑の山に白い領巾が麾いてゐる、青い海に白い帆が走つてゐる。ちへの夢を今見て、一しほ趣が深い。彎曲した海の縁を取つて長く続くは虹の松原である。津の町が微かに見え二三の島が海上に点在する、後は松浦川を隔てて、淡く霞んで丘が起伏する東の方遥に細い玉島川が流れて居る。憶良が若鮎を釣る美はしき娘子に会ひ、歌を贈つた所である。心はまた昔にかへる石に踞して茫然たり。やゝ暫く今度は海に面せる正面より下山した。背面に比し、道は広けれど一層急である。足ががくがくする。船遠ざかるに従

ひ、一歩一歩と佐用姫は此処を登つたのである。半下ると松原が邪魔になる、蓋その頃海は山のすぐ麓まであつたのだらう、左様でなければ面白くない。下つて虹の松原を逍遙す、前後二里に亙る、日本無二の松原ださうだ、成程美しく大きい、時に日漸く低く海が紅く燃えた。海より来る風が一刷毛に松原を撫づれば、松は一様に陸の方に靡いたその形がわざとらしからず面白い。砂はもとより純白である。虹よ、虹よといふものがある、虹よ、虹よと答へるものがある。仰げば半空を劃せる紅の虹が美しき松原と、美しき山を中心として、はつきり描かれてゐる、夢の様な事実である。皆々余りの嬉しさに手を合せて拝んだ。其下に夕立雲がむくむくと起つてゐる、来ては大変虹の消ゆるのを待つて周章てゝ駈出した。

(八) 佐世保 (八月十五日)

瀛車から降りた五人は、予期に反して、此街の汚いのと淋しいのに驚きながら、平戸行の瀛船を尋ねて、海岸の方へ足を運んだ。石の橋を渡つて直ぐの回漕店で聞いて見ると若い者は港の彼方を眺めて「ああ最早出てしまひました。」と云ふ。五人は仕方なしに、明日の船を待つて宿屋に投じた。

佐世保は思ひの外不恰好な街である。一点ぽたりと落ちた墨が、次第に左右へ広がつて行くやうに、一軒の家が次第に膨むで往つて此街を形造つたのであらう、唯徒らに細長い、真直な大通が一筋、拳骨のやうに中央に横はつて、肋骨とばかり数多の横町を走らせて居る。

宿屋は下が車屋で、隣室には赭ら顔の大男が、裸体の儘で寝て居る。前の湯屋に行つたが、借りた手拭は五人ながら紅木綿だ。此家は理髪床兼業で、掲示に犬及び其他の動物を洗ふべからずと書いてある。すべて佐世保の街は共生を営むで居るので、氷屋と足袋屋、料理屋と瀬戸物屋などが、一軒の家に生活して居るなどは、余り他に見られない有様であらう。

宿に帰つて夕方から町へ散歩に出懸けて見れば昼の意気銷沈した姿とは違つて、極めて盛んな光景、海軍士官がゆく、水兵がゆく、小僧がゆく、職工がゆく、人夫がゆく、乱雑な響が四辺に満ちて、人いきれで蒸されるやうに思はれる。暫時歩くと角の氷屋で赤い布を鉢巻にした男が、大きな声で客を喚びながら、鉋の上で氷の塊をぐる〳〵と廻はして居る。一寸奇観だ。其横町を曲がると夜店がある。肺量機、瀬戸物売、石鹸売、水菓子売の店が、方々に陣取つて、いろ〳〵な声を挙げて、人を喚ぶのである。熱鬧の区、煙塵の巷、かゝる所を過ぎた時、旅情の甚だ切なるを覚えたのは、何故であらう。K生は即目を叙して左の一詩を口吟した。

ランプの明り、カンテラの
灯かげ煙れるせりうりの
夜店の中に、一段と
声はりあぐる瀬戸物屋。

「早来い、早来い、品物は
みんな廉か。」といそがしく
左のふときてのひらを
握りこぶしに打叩く

「この花いけは有田焼、
買はつせ、買はつせ、そら弐円。
廉か。」と呼べど、群集は
冷然として繞り見る

「弐円、壱円五十銭、
七十五銭、四十銭
ああ、負けましよ、二十銭。」
赤き裸を汗はしる

わが売る品のあたひをば、
耻づる色なく、おのれから
下げて手を打つ、あはれなる
佐世保の街の瀬戸物屋

更はあはれむ。汝が妻は
死にか別れし、みそかをと
はたや逃げたる。三十の
男ざかりのやもめずみ。

後ろを見れば、竹たてて
夜露に吊すハンモック
眠りてありぬ、青白き
五才ばかりの娘の児

(九) 平　戸　(八月十六日)

朝十時佐世保抜錨の滊船に乗つて平戸に向ふ。湾口を出るに当つて今更この港の広いのに将た一体九州の海岸の長いのに驚いた。併し此港は顧みて軍艦の厳しいのや、起重機の高いのに驚きこそすれ、決してかの出船の甲板に感ずるところの、後ろ髪を牽かれる様な、甘い情緒を起させる所では無い。予等は船尾に陣取つてまどろむで居たら、天幕を漏れる日光が恣に人の背中を刻むで酷烈堪へ難かつた。

暫くして玄海灘に出た。水は悉く真鍮の色に黄ばむで、日の下のものなべて虚なるかの感がする。

此船のボーイは愉快な十二三の少年であつた。甲板のスカイライトを指して何といふと聞いたら、先生ぬからず「ストライキ」と答へた。此少年を捉へて少時船上の無聊を慰めてゐるうち、向ふから滊船の来るのに遇つた。彼のボーイはスツクと立ち上るや否や、船尾に走つて其処の旗を下げ又上げ

た。そして一声「エ　糞ッー」と叫んだ。膝栗毛の箱根山の雲助の挨拶も思ひ出されて面白い。夫にも拘らず、瀛船はいかにも鄭重に挨拶したかの様に、飈揚に擦れ違つて行くさまは一層面白かつた。

平戸には午後二時頃着いた。狭い漁人街を通つて直ぐ下島氏を訪問した。案内された書斎は瀟洒として気持がよかつた。窓から樟の大樹が見える。枝の間には三百年前の開港場が見え透く。殊に庭前には朝鮮から来た酒壺が累々と転がつて、居室には古い阿蘭陀皿があるのを見ると、身辺に一種異様な雰囲気の逼るのを感ずるのであつた。また床の間には唐渡りの小さな衝立があつた。黒く塗つた面に、青貝で司馬温公の家訓が刻むである。此裏を翻すと詩仙雅会の図があつて、光線の来方で色々な色をあらはす、屢多くの人は、其少年の時に、何処か親類かなんかの家で恁んなものを見るものだ。さうして、そんな事は一切忘れて仕舞つた後になつて、自分の過去に何事かブリリアントな、再び回想すべからざるものがあつた様に思ふて、ひたすらあくがれるものだ。

下島氏に繻導せられて亀岡神社に登つた。鯨の骨だといふものがあつたが、別に意を引くに足るものではない。それから「阿蘭陀塀」といふものを見た。当時の蘭人が築いたものださうだ。磯石をセメントで繋いだといふが、どうも漆喰らしいと其道に深いB生が言つた。漆喰だとすると、三百年後の今、多少吟味する価値があるさうだ。それから又阿蘭陀井戸だの、阿蘭陀燈台だのを見た。後者は海に突き出た一角に昔築いた石垣が乱れてゐる許りだけれども之に夕日が燦然とあたる時には、大に画家の眼を喜ばしむるに足るものがある。

此町を歩いて気が付いたことは比較的美しい容貌の女が多いことだ。九州に入つてから珍らしいことだから、此町は美人系だなどと興がつたが、唯其顔色が美しいに過ぎないと思ふ。

夜半に瀛船が出るさうだから、米屋といふのに休憩し、夕餉を済ました。楼は水に臨んで港全体の光景を一望の下に集める。上等兵に成つて帰つたといふ男が銃槍を教へてゐるのを、土地の人の色々な種類が立つて眺めてゐる。夜又散歩して幸橋、阿蘭陀塀に涼風を求めて帰つて楼上に仮睡した。水の音、船に荷を積込む声、隣室の喇叭節などが聞えて、港場の夜の声は何となくしいむみりとして哀れ深い。此港が紀州勝浦に似てゐるといふ人があつたが、自分も如何にもと思つた。暗い中に、黄と赤と青の三燈を掲げた瀛船が、物を待つやうに静かに構へてゐるのが見える。

今日町を歩き乍ら出来る丈外国語の日本化したのを捜さうとしたが、余り集らなかつた。昔は長崎に多かつたらうが、文明の伝播の早い今日は、却つて比較的に不便な此地あたりに最も多く残つてゐるらしい。ボーウラ（南瓜）コブノエ（蜘蛛の巣）トッチンギョウ（木の梢）の如きは其の二三の例だ。

(十) 荒れの日　(八月十九日)

風は朝となつて愈々激しくなつた。長崎港には灰色の波が騒いで居る。折々沛然たる驟雨がやつて来て長崎を流さうとする。

赤玉は依然として竿頭にぶら下つて怖れの象徴となる。船が出ればよいがと心配したが、その内に大分和ぎ、日も出たから兎も角もとて乗合馬車の窮屈を忍び二里の山路を茂木へ向つた。茂木は率土の浜である。干潮で水涸れ〳〵の川が橋を境に海に通ず橋の上には鷺が数十泳いでゐる。橋の下なる海には黒い子供が数十泳いでゐる、同じ様である。風がある。小漁船が二艘桟橋に繋がれてゐる。乱雑、活動の港長崎と比べると隔世の感がある。その一に乗つた。十一時出帆、天草諸港へ行く船である。相変らず後甲板を占領す。ボーイが来て下へ入れといふ、此の暴風では甲板は波が被ると脅す、沖を見るとどす黒い中に白波が見える。風は山に鳴る、B生は驚いて下に逃げ込んだが、後の四人は甲板に残る。艫が鳴つて機関が働き出すと直ぐ揺れ初めた。下の船室には男女十四五人ごろ〳〵と芋の様に寝てゐる。昨日もいい加減ひどかつたが今日のはまだまだひどい、昨夜なども山の窪へ船を入れて寝てゐると、此方から彼方へころ〳〵転がるが、転がるのはいいが柱へ頭をぶつつけて寝られたものぢやなかつたとボーイがいふ。円い小さい眼の様な窓の穴も波が入るとて閉めて仕舞つた。風の故か左程蒸熱くもない。小さな船は常さへも荒れるといふ千々岩灘を此荒の日に横ぎらうとする。行くに従つて海は愈々荒る、白い毛を頭に被いだ怪物が海を埋め、己れ小癪と船をめがけて八方からひし〳〵と攻めかかる。船は思ふが儘に弄れる。思へば船も亦怪物である。鯨の一種である。頭もある、尾もある、腹も背もある、さう思へば眼もある、鰯の代りに石炭を呑み、潮の代りに烟を吐く。ひらひらと弄ばれながらも蕊に進んでゆく。風がざざあと鳴ると波がどどおと答へる。空には灰色の雲がまだらに散つて荒れ狂ふ怪物に応援して居る。何しろ痛い暴風だ。斯くとは初めから分つてゐたのに、今更不平もいへぬ。頭を上げれば酔ふ、眼を開けば酔ふ、体を動かせば酔ふ。横に寝て、自分を一個の物と見做して、波のまに〳〵運動するに限る。酔やあ仕まいかなどと思つてはならん。すうつと昇る時は体が船にどしんと中る、どうつと降る時は体がふわりと浮く、いい気持だが、又いやな気持である。左右に揺れるとごろ〳〵と転がる。B生は船室にあつて廻りでがあ〳〵物を吐く声を紛らす為に全二時間口を衝いて出る限りの歌を繰り返して歌つて居る、後甲板ではM生がこれものべつに鼻唄を歌ふ、K生はころころと転んで危ふく波に陥らむとした、I生は黙して眠る、玆に唯一人H生は勇を鼓して起きてゐた、猛り狂ふ瀾を快しと眺めしや否やは知らぬ、兼ねてボーイの喧嘩の仲裁者であつたそうな。僅に後の方一部を残して甲板はざつ

と許りに波に洗はれて居る。曇れる日は晴れさうに無い。斯の如くして時が進んで向ふに天草が見え、艇へて内海に入ると波は次第に静まつた。もう大丈夫、甲板へ出てもとボーイが得意になつて触れ廻る。人はやつと蘇生した。波静かなる富岡港に上陸した。細長い小半島の終点に富岡城の趾がある、細長い町を挾んで西は外海の波が荒て居る、東は偽の様に平な内海である。町長松本氏から天草の乱に関する諸々の事を聞く。話の序にピヤアロンの事が出た。美しく飾られた幾艘の船が更に幾十艘の小船の勢援の下に行ふ支那流のレガッタであるさうな、普通五月の節句にやるのだといふ。天草の乱の時独此の城が陥らなかつたといふ様な話を聞いた。又武田氏の蔵書「天草見録」と云ふ写本を読んだ。

(十) 蛇と蟇 (八月二十日)

富岡より八里の道を大江に向ふ。難道だと聞いた。天草島の西海岸を北より南へ、外海の波が噛みつくがり〳〵の石多き径に足を悩ましつゝ行くのである。土瘦せたる天草の島は稲を作るに適せぬ、山の半腹の余裕なきに余裕を求めて甘藷を植ゑる。島民は三食とも甘藷を食ふ。或る処は川が路である、点々たる石を伝ふて辛じて進む。その多くは墨々として砂礫尽くるなき荒磯左に聳つ嶮山の裾を伝ふて行く。足早き人K生M生はずん〳〵先へ行く、目的はパアテルさんを訪ふにある。足遅き人I生H生B生は休み〳〵ゆつくり後から来る、目的は言ふが如くんば歴史にあらず、考証に非ず、親しく途上に自然人事を見聞するにある。大岩に罅が入り象形文字の様に見ゆる断崖のもとを廻る処で紛れてしまつた。顧みれば淡く霞んで富岡半島がまだ見えた。三里か四里は来たらう。茶屋の婆に婆さんの言葉はちつとも分らぬと言ふと、あんた方の云はつしやる事も分かいまつせんと言つた。婆さん子供があるかい。ありますとも。幾つだい。幾つだつて大勢居るさあ。爺さんは居るのか。爺さんかね、爺さん居らつさんば、一寸楽みも無かとで御座いますたい。とやつたので皆吹出してしまつた。歯抜け婆さんの愛嬌のある事よ。暫く行くと先に立つたH生がぴたりと止つた。五尺余りの大かゞち、紅き地に黒き斑を物凄く染め出した縞蛇が犬の頭程の蟇を呑みかけてゐる。岸を打つ波の音は白い、山を吹く風は青い、その間を縫う径の中央で蛇が蟇を呑む。三生暫くは呆れて眼を見張つて突立つた。人ありと知るや知らずや、蛇は長き体をうね〳〵とうねらせて草の中へ引きずり込まうとする、蛙は弱いが重い、前足の一つを噛ませて固く執つて動かぬ、或は既に死んだのか知れん。強者弱者を食ふ比ぶるものなき残忍なる行為だ。自然の一部には眦をさいて呪ふべきものがある。やはか許すべきと路傍の大石を空高く振り翳したるI生は近いた。やつと言ふと蛇は砕けた、と思ひの外どうも無い、打たれて痛かつたのか暫くは動かぬ、今度は赤い舌をべろべろ吐いた、吐いた舌を従順なる蟇の背へ向け食ひついた、く

わつと怒つたI生は此時他の石を拾つた、今度はと思つたが失策つた、中つたが死なぬ、するすると伸びて叢へ逃げこんだ、そら来たといつてI生は海の方へ逃げ出した、B生もあわてて逃げ出した、H生は後の始末を見届けて、何れも波打際に転がつて居る石を渡つて行く事にした。途に小い炭坑があつた、古ぼけたボイラーが破れた家根の下で燻つて居る。山を腹に穴を明けて石炭をえぐり出す、奥を見ると真暗な穴の入口に裸の男が暑さうに寝て居た。暫く行くと道は山へ登る、羊齒が青々と一面に繁つて暖き南の国の香を送る。脚下の白い波をたどると水平線が大分高まつて居る。杉の木立が黒ずんで山麓を飾る、その間から紺碧の海が見え、涼しい風が吹く。汗は背、腹を洗ひ、頭から流れるものは眉を溢れて頬に伝ふ。水あれば水を飲み、茶あれば茶を呼ぶ、今朝から平均一人五升も飲んだか、腹がだぶ〳〵する、胃はもう沢山だといふ。喉はもつと欲しいと促す、勝は常に喉に帰した。山の方が道は楽である。峠を越す事二つ三つにして下津深江といふ湯の出る港へ着いた。午後二時。先着のK生M生が待つて居た。畏事譁習会の災する処となつて茶屋も宿屋も断られ、大いに困つて此処へ頓んだといふ、瀟洒なる物売る家の二階に通る。老主人来る、頗る慇懃である。一体この辺の言葉はとんと素人には分らぬ、それかあらぬか、老人は気を利かして一切土語を語らぬ。「君達は」と口を開いた、これは最上の敬称代名詞の積りと見える。「いづ方へ参られまするか。」又言ふ「道は甚だ険道でありまするとは雖も」又言ふ「必ず以て参られまする、は、は。」その代りよく分つた。梅干も奈良漬も皆甘かつた。一睡して、大江迄もう四里、訳はないと、三時を過ぐる幾分に出かけた。

(十四) 大失敗 (八月二十一日)

五足の靴は驚いた。東京を出て、瀛車に乗せられ、瀛船に乗せられ、唯僅に領巾振山で土の香を嗅いだのみで、今日まで日を暮したのであつた、初めて御役に立つて嬉しいが、嬉しすぎて少し腹の皮を擦りむいた、いゝ加減に御免を蒙りたいといふ。併し場合が許さぬ、パアテルさんは未だ遠い〳〵道を誤へて後戻りするやら何やらして甚い嶮しい峠を越えると川がある、川の中に馬が遊んで居る。高浜の町は葡萄で掩はれて居る、家毎に棚がある、棚なき家は家根に葡はす、それを見て南の海の島らしい感じがした。豆を豆殼より離さむと槌もて莚を打つ子がある。三生は橋に凭れて暮れゆく雲を見る、二生は富岡に倣つて駐在所を訪うたが留守だ、昔の大庄屋の家へ出かけ天草の乱の考証中である、此処は面白い、宿らうというH生の提議もパアテルさんには敵はん、H生は詩を作る。

わかうどなれば黒髪の
香をこそ忍べ、旅にして
わが歴史家のしりうごと

「パアテルさんは何処に居る。」

南の海の白鳥の
颯うかぶと港みて
舟夫らはうたふ。さりながら、
「パアテルさんは何処に居る。」

遍路か、門に上眼して
もの〳〵しげにつぶやくは
「さて村長よ」またしても
「パアテルさんは何処に居る。」

葡萄の棚と無花果の
熟きくゆりに島少女
牛ひきかよふ窓のそと
「パアテルさんは何処に居る。」

かくて街巷の紅き灯に
三味もこそ鳴れ、さりとては
天草一揆、天主堂
「パアテルさんは何処に居る。」

パアテルさんの事は明日誰かが書く。日は沈んだが一里だ、行つて仕舞へといふので出かけた。二生は先へ行く、三生は後からぶらぶら行く。だん〳〵暗くなる、自然の上に荘厳の色が加はる。醜いものを消してしまひ、常のものをぼかして美しくすると共に、美しいものを愈々美しくする。道は山へ登る、凄く美しいと思つて潜つた杉の木立も次第に恐ろしくなつた。地獄へ入る思ひがする。山腹の段々になつた芋畑が蛇の腹の様に見えて怖ろしい、怖ろしいと思ひ乍ら登つて行くと先行の二生が待つてゐた。もう少しだ、薄明のある内に早く越えてしまはうと玆で五足の靴が合して、とつぷり暮れた山道を傍眼も振らず、労れた足を乗せて行く。微に明るい空には夕立の雲が直ぐ降るぞと表れて居る。振り返ると遙か底の方に高浜の灯が見える。山の真中だ、人の声はもとより無い、鬼気肌に迫つて来る。踏む所は相変らずガリ〳〵の石の上である。躓き乍ら、分れ道のあるのに直なる方を取つて、づん〳〵進んで行つたのが抑々誤りの第一歩であつた。道は、次第に狭くなる、I生がどうも怪しいと言ひ出した、M生はなに大丈夫、あの山の峰の森が切れて居る、あの切目へ出る筈だといつて先へ立つて無二無三に行く。暗い〳〵、足で探り辛うじて道を求める。道は愈々狭い、如何も怪しい、とうとう道が無くなつた。M生も流石に弱つた、道を違へてからもう余程来て居る、方角が全然違ふらしい、夫も一歩を誤らば百尺の谷へ陥りさうな危い径であつた。体は労れてゐる。如何仕ようといふ問題が起つた、野宿をしようか、元へ戻つて高浜へ泊らうか、先の所迄下つて左へ曲らうか、この暗さ

では何れも容易に行はれさうに無い、パアテルさんの祟りである、どう考へても安全の策は無い、窮した、先立てる者は後れたる者を声もて導く。滑るよ、危いよ、石だよ、急に下るよ、左は崖だよなどと言ふ。それを順に後へ伝へる。蝮を踏みはせんかといふ心配もある、元気を喚起さうとM生は独演説を初めた。人もや有ると万一を期してオオイと呼ぶ、オオイと答へる。山彦らしい。オオイと呼ぶ、答へが無い。人かしら、オオイ、モシモシ、「誰だ」と暗い山がものを言ふ。占めた、人が居る然も畑を挾んで直ぐ向に居るが、如何やら唯人ではない、夜盗の種類では無からうかと興奮してゐる頭は余計な心配をした。「東京の学生で天草の歴史を調べに来て居るものだが、今日は富岡から来たのだが、道を間違へて」「ア、さうですか、私等は大江駐在所のものです」安心した、近づくと平服巡査二人が角燈を後へ向け、「実は犯人捜索の為めに来たので御一所に行き兼ねるが、これより三十米突先に小屋がある、そこの男に案内させまつしやう、これから先は下りだから何でもありまつせん」と親切に言つて呉れた。此処から左へ行けば何事も無かつたのである。助かつた。少し上ると成程破屋に爺と若い男とがカンテラ点けて仕事をしてゐる、そこへぞろ〳〵入つて行く、芝居がかりである、先づ茶を請ふて干いた喉を沾したのはよかつたが、提灯も蠟燭も何も無いといふ。この暗さでこの山道はとても歩けぬ、窮して通ず、松明を作らうといふ、M生は経験があるさうな、竹を割つて藁を包み、それに火を点じた。山がぱつと輝く。若い男が夫を振つて先へ立つ、後から五人がぞろ〳〵続く、如何にも芝居がかりだ。松明の照す処昼を欺く、思ひの外明るい、六つの陰影が石を跳ぶ。もう五丁、もう三丁と労れきつて大江村へ着いたのは十時である。汚い木賃宿めいた宿へ案内された、宿めて呉れといへば、すつかり塞がつてゐて御気の毒だがお断りだといふ。これでとう〳〵馬琴式になり終つた。巡査に会つたのも馬琴式だ、松明も月並だ。折角の難渋も落ちがわるいので滅茶滅茶になつてしまつた。それでも頼んで泊めてもらつた。

(三) 大江村 (八月二十二日)

昨日の疲労で、今朝は飽くまで寝て、夫れから此地の天主教会を訪ねに出懸けた。所謂「御堂」はやゝ小高い所に在つて、土地の人が親しげに「パアテルさん、パアテルさん」と呼ぶ敬虔なる仏蘭西の宣教師が唯一人、飯炊男の「茂助」と共に棲んでゐるのである。案内を乞ふと「パアテルさん」が出て来て慇懃に予等を迎へた。「パアテルさん」はもう十五年も此村にゐるさうで天草言葉が却々巧い。「茂助善か水を汲で来なしやれ」と飯炊男に水を汲んで来させ、それから「上へお上りまつせ」と懇ろに勧められた。又予等が乞ふに任せて、昔の信徒が秘蔵した聖像を彫むだ小形のメダル、十字架の類を見せて呉れた。夫れに附いてゐた説明の礼には、

「このさんたくるすは、三百年まえより大江村のきりしたんのうちに、忍びかくして守りつたへたる貴きみくるすなり。これは野中に見出でたり。」云々と書いてあつた。此種類のものは上野の博物館にあつたやうに覚えてゐるが、却々面白い意匠のものがある。

「バアテルさん」は其他いろ〳〵のことを教へて呉れた。此村は昔は天主教徒の最も多かつた所で、島原の乱の後は、大抵の家は幕府から踏絵の「二度踏」を命ぜられた所だ。併し之で以て大抵の人は皆「転ろんで」仕舞つて、唯この山上の二三十の家のみが、依然として今に至るまで堅く「ディウス」の教へを守つてゐるさうである。是等の人は今尚十字架、聖像の類を秘蔵して容易に人に示さぬ。或は深く柱や棟木の内に封じ込んでゐるものもあるさうだ。それで信者は信者同志でなければ結婚せぬ。縦し信者以外のものと結婚するとしても、それは一度信者にした上でなければならぬ。いや、今は転んで仏教徒になつてゐるものでも、家の子の出来た時には洗礼をさせ、又死んだ時にも、表面は一応仏式を採るが、其後更めて密かに旧教の儀式を行ふさうだ、棺も寝棺で、内服装も当時の信徒の風に従ふのださうだ。予等は又「バアテルさん」に導かれて礼拝堂を見た。万事瀟洒として且つ整頓してゐるが、マリア像の後に、赤き旗に「天使の皇后」「聖祖の皇后」と記されたのは、少々辟易せねばならぬ。併し此教会に集る人々は、昔の、天草一揆時代の信徒ではなくて、此御堂設立後、二十七年の間に新に帰依したものである。それは、大江村に四百五十三人、それから此の「バアテルさん」が一週間交替にゆく崎津村に四百五十九人あるさうだ。尤も昔の信者の家々も教会に集りこそせざれ、一週一日の礼拝日は堅く守つて、その日は肥料運搬等の汚れた仕事は一切為ない。所が何ういう間違か、それは日曜日でなく、昔から土曜日ださうだ。

一体日本近世の歴史で最も興味あるものは、戦国の終、徳川の初期に於ける外国文明の影響の如き其一であらう。此時代の新しい緻つた研究の渺いのは遺憾である。殊に長崎、平戸、天草辺から入つて以た日本化した外国語などは、殆んど注意されずに消えてゆくらしい。若し恁んなことを調べる積りで九州下りまで旅する人があつたら屹度失望するだらう。土地の故老、吏員などに質しても、彼等は惘然として答ふる所を知らない。

余り「バアテルさん」のことに引絡まつてゐるとまた一行の人から諧謔詩などを書かれるから、今度は此村の有様を記さう。非常に薩摩に似てゐるとK生は言つた。兎に角辺鄙な所で、三面は山、一面は海、猫額大の平地には甘藷が植つてゐる。之と麦飯とが此地の住民の常食だ。此朝H生が髭を剃りに出懸けて、不図昨夜山中で巡査に遇つたことを話したら、それから夫れと問ひ詰められて、結局「貴方達ちやあ、何しにそぎやん旅行きなはんな？」「そぎやん金どぎやんして儲

けて来なはつたな？」と驚嘆せられて戻つて来た。序だが、昨夜の賊といふのは金二十五円を詐欺して逃げたのださうだ。此島に取つては稀有の大事件らしい。

天主教会を下つて海浜の街を歩いた。夏の真昼だから可いものゝ、之が例の秋の夕暮ででもあつたら、其蕭条たる風物は木乃伊にでもされて仕舞ふだらう。宿は木賃同様だから頓と食ふべきものがない。所が幸ひ此散歩の途で南瓜を見付けたから、之を購ふことにして価を問いたが、主人は幾許でも可いといふ。「南瓜」なんか、此村では売買しないさうだ。結局三銭出して提げて帰つた様は聊か滑稽だつた。

午後二時、牛深行の渠船に乗る。牛深には夕刻着いた。今津屋といふ宿屋に宿つたが、楼上から市街を瞰ると、何れも屋根の棟が（水平でなくて）多少上方に彎曲してゐる。屋根を越えては又薩摩の陸影が見る。

夜街を散歩して漁人町の芬々たる異臭はた暗い海浜を通つて、終に土地の遊女町に出た。唯だ三軒のみで、暗き灯、疎なる垣、転た荒涼の感に堪へなかつた。上の家は桔槔の音が聞えて足下に蟋蟀が鳴くなどは真に寂しい。

(四) 海の上 （八月二十三日）

不届な宿屋（にして回漕店を兼ぬる家）である、朝三時の乗込といふに、丁度三時に起し、周章てなければ間に合ひませんと言ふ。嗽ぐは勿論、顔洗ふ暇もない、大にうろたへて昨日H生の知人から貰つた西瓜を抱へて渠船に乗込んだ。船の灯が三つ四つ見え、ゆるやかに潮流るゝ夜の港を賞したいは山々だが、如何にも眠いので下へ潜つて寝てしまつた。眼を覚すと夜が明けて居る、一同円くなつて西瓜を食つた、その旨い事非常である。西瓜は日毎に二つ三つ食ふ、九州は何処へ行つても西瓜の無い所はない、最も旨いものも西瓜である、殊に天草と島原はその産地だ、余り食つて揃つて腹を悪くした日もあつた。甲板へ出る、船は天草海峡を走つて居る、美しい多くの島が青い霧の羅衣を被いで寝て居る、柔かな光が水面を撫でゝゆら〳〵と揺れる。島の間に褐色の帆が散らばつてゐる、山のたたずまひ、静かな海の様子が瀬戸内海に似て然も大に勝る所がある。静かな海を静かに走る船は山の眠りを覚すまいと気遣ふ。天草島の最南端を発し、最北端を乗り越して肥後国際崎に着いたのは午後二時である。今日一日は海上に生活せんけりやならんのである。故に昼飯も陸上では食はぬ、際崎の船着場に大阪流の船料理がある、そこへ上つた。厳しい暑さだ、海へとび込みたくなる、K生を残して皆飛び込んで泳いだ、島原行きの船を待つ間の一興である。五時に三角から島原へ船が出る。三角まで十町今日久し振に陸を歩くのである。三角は近年態本の人が好んで海水浴に来る処であるといふ、三々伍々、田舎者の癖に嫌に威張つて歩いてゐる。三角から島原へ行く海路の景色は今日まで見た自然の内で最も美しいものであつた。紺青の温泉ヶ嶽が西の方

行く手に聳え、日はその上にかかる、空の色、海の色の刻々に移り行くを眺めて夢の様な心になる。日が沈む、海が紅に燃えた。島多き島原へ着いた、真黒な眉山が港を脅かして居る、いゝ所だ。島原の港はK生の詩でその一斑が分らう。

今宵の客は唐津から
酒を積み来た船乗衆
港を埋むたけ高き
無花果木原色街の
海に臨める欄干には
ふんどし一つ、黒々と
裸のそろひ、さかなには
大皿に盛る瓜、西瓜。
むし暑き夜や、なまぬるき
海の風ふく　たはれ女も
胸乳あらはに衣ぬぎて
紅木綿なるゆもじのみ
わづか掩ひ、上目して
客衆の膝によりかかり、
はた、肱をつき、腹ばひて
皺子蝶ならすしだらなさ。

ほろ酔きげん、船乗は
胡坐をゆすり、手をば打ち
さつさ歌へと猥らなる
唄のかずかず。芸妓衆は
汗しづくして三味を弾く。
中に、しら髪の爺一人、
しやがれし声に追分の
その一節ぞあわれなる。

下を通るは、かあちかち、
辻占を売る引板の音。
「よき運ひらくか、ひらかぬか、
待人きたるか、きたらぬか。」
奴すがたに肩ぬぎし
声よき艶女、ちりめんの
襦袢の袖の緋の色に
島原の夜はなまめきぬ。

九州人は原という字が下に来る地名を凡て「ばる」と云ふ。島原も「シマバル」だ。風俗の淫靡なことは有名なものだ。良家の処女と雖も他国から来た旅客が所望すれば欣々として枕席に侍する、両親が進んで之を奨励する。他国人と一度関係を結ばぬ女は縁附が遅いと云ふ程だ。

(去) 有馬城趾　(八月二十四日)

翌日朝飯を終へてから有馬城の故趾を観にゆく。島原の市街は存外に大きく、較都会の観を呈してゐる。街の両側には清水が流れて川底が見え透く程澄んでゐるが、之が飲料水だと聞くと折角の快感が害はれる。川の中、店の前、車の上、全町到る所に西瓜が多いのには驚かざるを得ぬ。

有馬城は可也大かつたらしい。旧記には原城、丙城の二箇所に分れてゐたやうに書いてある。今城趾は荒れて悉く桑畑に成つてゐる。畠の中には随所に石垣が残つて、例の不恰好な中学校、小学校、監獄分監などが其間に立つてゐる。城の石垣には一面に灌木が生ひ繁つて、壕には蓮の花が藤色の台湾藻の花と雑つてゐる。多くは水涸れて里芋が植ゑてある。

此城を見るものは、誰でも第一に天草四郎のことを想起すに違ひない。こゝは彼が最後に拠つて終に滅んだ所である。殊に其戦歿の時が十七歳であると聞いては、何故ともなく一種悲壮の感に打たれる。此一揆の起因は兎に角、之が盟主となつた少年彼の動機、其心理等に至つては、旧記の載する所甚だ渺く、却つて後人の自由なる忖度の余地を残してある。自分は天草四郎の事蹟には既に成心を持つてゐる。始めは唯だ想像に過ぎなかつたが、今は必然さうなくてはならなかつた事実の様に思はれて来た自分は天草四郎を一の天才と見るに躊躇ひぬ。そして彼は又其時代の精神に触れて……否現時吾等が感じてゐる様な近世的の鬱悶を持つてゐたに違ひないと思ふ。島原軍中話といふ本には「一揆の大将は天草甚兵衛が子益田四郎時貞といふものなり。幼少より才智人に勝れ、苟且の遊戯にも兎角弓矢を手狭み、木太刀を取りて人に迫合ふことを好む。後習学の功を積まずして才覚双なし、切支丹に深く立入云々」と書いてある。当時九州西部の切支丹の徒は幕府の迫害が烈しくて、廿六年前の夢のやうな讖言「当年より廿六年目にあたり善人一人可出生、其者幼なくして諸学を極め天にしるく顕る可し、枯木にも花咲き、山野に旗を立て諸人の首にくるすを立つ可し。東西雲の焼くること近々ある可し。「ディウス」を尊ぶ時至る可きなり。云々」と信じて、何物をか期待すること、昔の猶太の民のやうであつた。時に森宗意軒、蘆塚仲兵衛、松島伴兵衛、会津元察などの面面、虚か真か、策略か、信仰か、集ひ群りて四郎と天草の民とを煽動した。一方には長崎、平戸の辺から駸々と外国文明が入つて来て帰来せる漂流者の話、美はしき南蛮国の磁器などは或は此少年の多感なる耳目に詩的憧憬を喚起したかも知れない。女は伽羅の油に髪を結という天竺、はた碧眼の美丈夫が皂縵帕に似たる衣を着くるといふ、入船出船の阿蘭陀の都に此世の幸を求めに行かうか。此の天下の変に乗じて男一代の名を成さうかはた荘厳なる金十字に跪いて彼の世の栄光を味はうか、是等の諸々の妖魔に群ひ来て彼の身辺を囲繞した。併し彼は最後に誇らしき天命に従つて天草の蒼民の心を救は

うと決心した。それから富岡、本渡海峡の辺を転戦して、終に此有馬城に拠つた。寒島の一少年兵を動かすこと三万七千余人、一世の人心を震駭して天下ために騒然、幕府色を失ふ。時に九州諸侯の兵来り囲むもの漸く多く、翌寛永十五年二月廿八日、彼は終に討死したのである。

自分は僅少な史的智識を基にして、此昔を忘れ果てたやうな有馬城趾に色々な旧き姿、象を並べて見た。併し漸く中央に登らうとする土用の太陽は恣に其黄金の矢を投げ注ぐので、人間生活の基本なる「現在の需要」に随つて、懶い足を又西瓜の多い多い町に運ばねばならなかつた。

(六) 長　洲　(八月二十五日)

爺さんが漕ぐ船の脚は遅い。正午、宿屋の裏から直ぐに乗つて、日本形の船の間を潜り抜けて、肥後国長洲行の渠船に乗つた、此度の旅中に出会つた渠船の中で最も小さなものだ、これで有明の海を渡るのかと思へば、少し心細く思はれる。鰻、梨子、焼酎等を売る女があつて「買はんせんかな、買はつせんかな」と叫びながら櫓を操る。暫時して船は動き出したが、折柄舷側に佇むで居た口髭の濃い運転士は「源がまたもどらんぞ」と云つて、船を其儘漂はさした若い水夫は、猶島原の浮かれ女が西瓜くさい匂に酔つて、飽かぬ思に耽つて居るであらう。

源が帰つて船が出る。渠笛は此の若い水夫が、離別に流した涙を嘲けるやうに響いて夏の真昼時ではあるが、恋の港の船出にはさすがに悲哀の情趣がある。見れば甲板の隅の方で、源は船長の前に立つた儘、悲しげにうなだれて居た。

物寂し相な、白色の燈台を左にして、船は緩やかに駛つてゆく。沖には千噸余の渠船が一隻碇泊して居て、海には浪の躍る日である。島原の港町が次第に隠れて、島原の城下町が次第に現はれて来る。其街の尽きる辺から、広く青々とした裾野となつて、高く仰げば温泉ヶ嶽は、大なる母の如く聳えて居る。山は避暑の西洋人で一杯だと聞いて登らなかつたのが残念だ。船の上は人が満ちて寝ることも出来ぬ。機関に続く一室の屋根に腰を懸けて、乗合の人を見て居ると却々面白い。前部には赤襟飾、赤リボン吊、赤襷の生若い男が居て、女の写真を眺めて居る。後部には、手織木綿の単衣を着た丁髷の老爺が居て、茫然遠方の雲を眺めて居る。此二人の間には長い過渡の時代が挾まつて居る。船は百年の時を乗せて駛つてゆく。

渋茶を飲みながら不味い菓子を食つて居るうちに、向ふの岸が漸々明かになつて、黄色の洲が見え出した。大牟田の辺から、黒い煙が盛に立騰る。炭礦と築港の産物であらう。其煙の消えて行く空には、鼠色の雲が一面に群がつて、微かに雷鳴の響が聴える。

長洲は其名の如く遠浅の海である。満潮の時には、辛うじて岸近くに波が砕けるが、干潮の時には、数町の間黒い海の

底が露はれて、貝の殼や小石が散在する。今丁度干潮の際で、五丈ばかりの石垣が高く現はれて、牡蠣が白く附いて居る。此堤防の中に横はつた小舟は、恰も時代から取残された哀れな人のやうに、砂の上に座して居る。此堤防の上には、小さな見すぼらしい燈台が立つて居る。

瀛船は陸から十町程離れて停つたので、艀船に乘り移つて暫らく行くと、艀船はまた陸から五町程離れて、舟子は其手の棹を捨てる。と見れば驚いた、岸の方から三四十台の人力車が、入乱れながら海の中をざぶざぶと進んで来る、車夫は水中に股を没して、何か声高に饒舌りながら、悠々と車を曳く。其間に交つて兵士が歩いて来たと思つたのは、滑稽にも田舍廻りの音楽隊の連中で、カーキ色のズボンを襞つて、太鼓を荷つたり、喇叭を抱へたりして、水中を渉つては艀船に近づき難いに驚いて居る。

そのうち艀船の両側に人力車が簇がつて押寄せる。客が争つて蹴込に飛込むと梶棒は忽ち動き出す。車は海の中を走つて行く。車の輪の心棒を隠す位の深さで、まるで橇が氷の上を滑つてゆくやうに、車は水の面を走つて行く。乘つて居る者の心地は世に例なき喜ばしさである。人は皆微笑して居る間に、三四十台の車は、厳めしい姿をして波打際に見張つて居る巡査の前を過ぎて殆ど同時に陸へ馳せ上つた。

十四　熊本　（八月二十六日）

長洲から汽車に乘つた時、驟雨が我々の上を過ぎた。植木の停車場では餅を売る、其呼声は「もち」では無くつて、唯単に「も」である。

上熊本の改札口を出て、今迄渇して居た東京の新聞を求めたけれども、見附からなかつたので、直ぐに人力車を走らせた。坂の上から下の市街を展望すると、まるで森林のやうである。が、巨細に見ると、瓦が見えて来る、甍が見えて来る。板塀が見えて来る、白壁が見えて来る。「あゝ、熊本は此数おほい樹の蔭に隠れて居るのだな。」と思ひながら、彼方の空を眺めると、夕暮の雲が美くしく漂つて居て、いたく郷愁を誘はれる。

旦那方阿蘇へ御登りならば、好い宿屋へ案内すると云ふ車夫の言葉を容易く信じて、導くがまゝに幾つか道を曲ると、何屋とか云ふ古ぼけた宿屋の黒い門の中へ引き込むだ。髪を振り乱して、白い歯を現はした古女房が飛び出して来て、裏の方へ廻れと云ふ。玄関の破障子を横に見て、周章てゝ鼠が逃込むだ台所口を通ると、懶うげな姿をして、背の低い娘が皿を洗つて居る。余り穢いと口には出さぬが、黙々の裡に皆の心は合して、庭の方へ出ると、先づH生が、「こゝは止めませう」と口を切る。客が何処の室でも寝そべつて居て、何となく心持が悪い。「今二階を明けます。」といふ女の声を後

にして、五足の靴を踏み鳴らしながら、勢よく裏門へ通り抜ける。若し此宿屋に口があつたならば、大きく開いた儘、長く閉ぢる事が出来なかつたであらう。

通りに出ると柳の生えた街である、文房具屋にダンテの石膏像があり、本屋に美くしい洋書のあるところ、稍都めいて居るが、猶野臭あるを免かれぬ、研屋旅館の支店で服の埃を払つて、塵だらけの帽子を床の間の上に投げ出した。

其夜知れる人を訪ひに往つたR生を除いて他の四人は唯徒らに街をさまよひ歩いた。白楊の並木のある道を過ぎて、兵営の前に出る。殺風景な軍営、没趣味な兵舎、これが此処のみでなく城の上まで占領して居る。喇叭の響には哀味があるが、カーキ色の服には詩趣が無い。かゝる物を置くのは、何処かの曠野がいゝだらう。噂に聞けば京都の紫野に兵営が出来るさうであるが、言語道断の事だ。こんな事を考へながら、名も知らぬ石橋を渡らうとした時、M生は突然「実に長崎に似て居るなあ」と叫んだ。多くの氷水の露店が並んで居る辺、川の面に夕暮の残光が落ちかゝつて居る辺、洋館めいた家が立つて居る辺、一寸髣髴として其面影を忍ぶ事が出来る。長崎、長崎、あの慕かしい土地を何故一日で離れたらう。顧みて云ひ知らず残り惜しい。

知らぬ街の知らぬ路に迷つて、ゆくりなくも二本木という強慾の巷に出る、白川の岸を辿りて帰らうとしたが、余り足が疲れたのと道が分りかねるのとで、辻車を呼んで飛乗つた。夜風は思ひの外に涼し。

其夜心の中で、かう云ふ断定を下した。「熊本は大なる村落である」と。K生云く。西郷は彼の精鋭の大兵を率ゐながら鳥勢の百姓兵に此処で負けた。

(六) 阿蘇登山 (八月二十七日)

妙な馬車へ乗る、一寸見ると並通の乗合馬車だが、中に畳が敷きつめてある、床の下に下駄を入れる所がある、畳の上に四人坐る、小さい座敷が動き出す様で乗心地が妙だ、初めの内は我慢も出来たが、砂烟がぱつと立つて断りもなく窓から入つて来る、夫が積つて、汗ばんだ手を黒くし、黒い洋服を白くし、白いシャツを灰色にし、畳をざら〳〵にする、堪つたものでは無い。おまけに道に敷かれた割栗が半埋れて、車を虐待する。がた、びしや、どしん、がら、すとんと複雑な九洲訛の蛮音を出させる、耳は聞えなくなる、頭はずん〳〵と痛む、之で八里余も行かねばならぬと思ふと悲しくなる。それも爪先登りのだら〳〵道だから遅い、遅い。一里行つては休む、休む毎に茶を飲む。大津といふ所で正午になつた。成る程聞いた通り菜は馬肉だといふ、汚なさうだからよしにした。彼此一時間も休んだ、田舎は暢気だ。此時濛々なる阿蘇の烟は風強ければ空の一半を掩ふた、日の光り為に暗く、眼を放てば遙に熊本の天に及んで居る。今日は山が荒れて居ると馭者はいつた。何と無く怖ろしい。遠く望んで之を

思ふは、近づいて親しく之を見るより、怖るべきは一層怖ろしい。神経の鈍きものは知らず、詩歌を解せざるものは知らず、あの灰の噴き出す穴を見に行くのかと思ふと何となく恐ろしい。外輪山の切れ目を入ると光景が一変する。平凡極まるだら〳〵道は一転して、山緑にして高く、水白く谷に砕くる懸崖の上に出る。田原山は嵐山にも勝る、戸下の湯は伊豆の湯ヶ島よりもいゝ。横手の山の頂から落つる細長い滝もいい。道は外輪山の中腹を廻る、高くつて急だからいやにうねる。太く壮んな真白の滝の落ちて白川となり、栃の木の湯のある辺から大道は日向へ抜ける。未だ日が高い。もう一里余行くと垂玉の湯がある、其処迄努力しようと嫌ふべき馬車を降りた。灰降る高原を五生は登つて行く、時々仰いでは群がる山の後から天へ登る灰色の烟を眺める。垂玉は未だですか。近かございます、あの山の壊るた所ですと女は教へた。青い山の剝げて土のあらはなるが見られる。山の道は近くして遠い。遠い路を登り尽くすと見よい滝が三つ四つ落ちて谷を流れる。如何した事か大なる山の一角が〳〵と崩れて谷を埋めて居る。それが極く新しい、そこだけ一草も生えぬ、頂きより谷に続く無数の石の死骸は未だ生々しい。丸木橋を渡つて来た小い可愛い女に湯は何処かと聞くともう近こございます、今御案内致しますと言つてすた〳〵行く。婢らしいが何処へ行くのだらうと見ると、崩れた山の岩を伝へ這ふ様に下りて来る男がある。殆ど絶壁ともいふべき所に不規則に転がつてゐる石を攀ぢ、石を匍ひ、石を滑つて素早く降りて来た、手に鎌を持つた男と小い女は暫く何か話をした。軈て返つて我等を導いて行く。くるりと道が廻ると、忽然として山塞が顕れた、あれは何だ、あれが湯ですと小い女がぶつきらぼうにいふ。後に滝の音面白き山を負ひ、右に切つ立ての岡を控へ左の谷川を流し、前はからりと明るく群山を見下し、遙に有明の海が水平線に光る。高く堅固な石垣の具合、黒く厳しい山門の様子、古めいた家の作り、辺の要害といひ如何見ても城廓である、天が下を震はせた昔の豪族の本陣らしい所に一味の優しさを加へた趣がある。これが垂玉の湯である、名もいゝが、実に大に気に入つた。石の階段を登り、大手の門を潜ると、正面に二階建の長い御長屋がある。絵に見る遊廓の様で、唯古色蒼然たるを異にしてゐる。左右に鶴翼を張つて、同じく二階建の楼閣がある。山を切つて広く平にならした運動場の様な庭も面白い。一体に規模の大きいのが気持がいい。湯も亦極めて大きい、三条の滝となつて石もて畳める湯槽に落ちる、色は無いが、細く白い澱が魚の子の様に全体に浮遊して居る。硫化水素の臭ひが鼻を刺す。一浴して廊に出づれば、そこら灰だらけである、踏むとざら〳〵する。むく〳〵と火口を出で一度空を渡つて落ちて来た地心の砕けであると思ふと、気持の悪い中にも唯の埃と違つて面白い処がある。遠く海に沈みゆく夕日を眺め、更に眼を転ずれば大空を筋違に灰色の烟が通る、新月が出て居る、山で見る星の

光りは極めて爽かで美しい、水の音が聞える。今は浴客が満ちて居るが、秋など唯一人こんな所へぶらりと宿つたら如何だらうと思つた。明日は天気がよさそうだ。

(九) 噴火口 (八月二十八日)

第二日は垂玉の温泉から噴火口を見に登つた。此路は殆ど二里許り、別に珍らしいものも無かつたが、蒼茫たる高原に馬と牛とが自由に駈け廻つてゐる様は快い眺めであつた。路は分りよいさうだが予等は念の為め仮に「六蔵」と名付けた案内者を頼んだ。此六蔵先生には後に酷い目に合されたが、登りは先々無事で、千里が浜を通つて阿蘇本社の所在地に出、そこの茶店で中食して後、終に絶頂に達した。

まだ噴火口の見えないうちから、既に褐色の煙は濛々と空を横ぎつて、為めに日の色は紫で、砂は気味悪い黄色を呈してゐた。火口に近くに随つて硫黄の香は鼻々と逼つてくる。噴火口が見えるや否や、予等が心は猛獣の如くに荒くなつた。口を閉して皆黙々として驚愕の目を瞠るのである。底を知らぬ不可思議なる大きな壺の口からは灰色の煙がもくもくと洶き、渦き、廻り、淀んで、空高く斜めに流れてゆく。其様が如何にも自覚と目的とが有るやうである。固より嗤々たる物音は分秒の休みなく喚いてゐる、——併し惘然たる凝視の間に予等は稍此光景に狎れた。そして愈々近く火口に歩み寄りて、終には巨石を此内に投じて其反応を検めようとした。果は此有名なる自然現象が、予等の驚嘆を喚起すること、大なる工場に及ばないことを笑つた。そして顧みると、三人の女学生めいた蓮葉の女達は、亦火口を瞰望してきやつきやつと笑つてゐる。平気なものだ。案内者六蔵は火口を目がけて七尺許りの金剛杖を投げる、と直ぐ高く噴き出されて十五六間あなたへかちりと音がして落ちた。径五六寸の石は投込んでも底までは届かずに噴き出して了うさうだ。三人の女連は扇を投げ入れた、是は一寸面白いとK生が喜ぶ。昔の人は心から自然力に驚嘆した。火を崇め、山を祭つた。内子孫なる今人は亦惰性的に自然を恐れてゐる。昔よりは衰へたが、併し今尚盛んな想像力で而かも現代の物質的文明から経験し得た諸々の写象を基として、外形的に巨大なものを自然から予期してゐる。そこで山に登る。登つてみれば、彼等の耳目に触れるものは、其日常見聞する所のものから、さう大して優れてはゐない。そこで彼等は失望する。彼等は経験こそ多けれ、其精神は昔の人程大きくないのだ。「崇高」は外に無くて、内に在る。昔の人は僅少な自然動にでも、全心を燃やす可き大なる火縄を得ることが出来たのだが、それが彼等には出来ないのだ。自分は山を下り乍らつくづく現代と自分とを詛つた。そして変な情動から駈け出したら、石に躓いて、倒れて、したたか肋骨を打つた。

此山の新火口は去年六月の頃始めて生じたのだ、旧い方はそれから稍隔つた所にあつて其底に熱湯を滾し、悠々と白気

を吐く所は、恰ら名を成して隠退した老大家の観がある。再び綱の茶店に戻つて休息し、将た渇望を満たしたりなどして、また案内者六蔵を先に立てゝ、千里ヶ浜を横り、来た方とは違つた路を採つて湯の谷温泉へ下り始た。山腹に立つて、大なる外輪山脉を眺めると、世紀末の今人でも、大きい古典的な情緒と、聯想とを起さずにはゐられない。此間に年寄りの夫婦が来て、道を知らぬから予等に随つて歩くのを許せといふ。そこで、漱石氏が「二百十日」式の、蓬々たる茅生の間を歩むこと殆んど二時間許りであつた。此山腹には、草といへば殆ど茅許りだ。それも毎日降り積む霧の為めに下拙画工の雪中蘆鴈図の様に灰色にぼけてゐる。所が一行の某生が気付いたところによると、この路は決して湯の谷の方向を指すものではない。「どんべん山」を中心として目指す所よりは九十度以上も余計に廻つてゐる。路は阿蘇村の方に行くやうである。そこで予等は飢ゑて荒野に彷徨ひ漂浪者が旅人に出遇つたやうに、此愚かな案内者を責めた。案内者は恐縮して兎のやうに路なき所を駈け廻つて路を探す。予等は益々困つた。恁んな風で予等に続いた老夫婦にまで飛んだ迷惑を掛けて、やつと湯の谷行の道を発見したときは、山を下り始めてから殆んど三時間半も過ぎた後であつた。湯の谷で休んで暫し憤懣の気を緩くしたのち、相議して、案内者には二十五銭だけ賃銀をやることにした。実際此辺では過分な報酬なのか、それとも恐縮に堪へなかつたのか「これぢやあ多かありまッせむか」といひ乍ら手を出して、金を受取り、又兎の様に飄然と去つて仕舞つた。

此日午後の暑気は亦猛烈を極めたものだつた。予等は談笑しながら無益にも多大の期望を抱きつゝ、夕の飯に馬肉を食はせられやうとは露しらずに、橡の木温泉に疲れた足を引摺つた。湯宿は一軒切りだ、而も入湯の客は百二十人も居る。座敷が無いので散髪宅と駄菓子屋とを兼ねた向ひの家の穢い二階に泊ることゝ成つた。

(十) 画津湖　(八月二十九日)

阿蘇の橡の木温泉から復六時間炎天の悪路をガタ馬車に揺られ乍ら熊本に帰つて来た。此馬車に乗ると大抵の人は五分位発熱するさうだ。K生は昨夜来風邪の気味で発熱して居る上此の馬車に揺られたから、体熱を検すると三十八度ある。甚だ太儀なので早く服薬して寝ようと思つて居ると、珍らしや旧友松村竜起氏が訪ねて来る。氏は今こそ熊本市随一の靴製造業松村組の主人であるが、十二三年前は予と共に韓国の学部に就職し京城の乙未義塾に教鞭を執つた人だ。当年の事が色々目に浮ぶ、殊に韓国の近状と思ひ比べて今昔の感が深い。氏は今夕予の為めに水前寺畔の画津湖に船を泛べる準備がしてある、既に先発して待つて居る者もあると云ふ。厚意辞し難く発熱を犯して人車を聯ね、駛すること一里弱、薄暮水前寺に着いた。水前寺はもと藩主細川氏の別墅であつたが、

今は一私人の有に帰して居る。之を市有として公園となす計画もあるさうだ。陰暦七夕の月明りで能くは見えぬが、瀟洒幽静、一寸岡山の後楽園を小さくした趣がある。併し彼の旭川の水を引いた池は格別美しくも無いが、この水は池中到処に清冽の泉が湧き出すのであるから清々しい。水前寺の後に画津湖がある。水前寺の水が落ちて大小二つの湖水と成つたものだ。松村氏は予を湖畔の旗亭勢舞水楼に案内した。既に座に在る者九州日々新聞社の上田桔梗、九州めざまし新聞社の相賀重蔵、九州朝日新聞社の城三十郎、九州実業新聞社の池本迂巷、雑誌「尚美」記者河瀬紫草の五氏、皆生面の人々である。上田氏から社長小早川秀雄氏が予に寄せた一書を受取る。氏も亦松村君と同じく韓国に於る旧知だ、氏が三角港に急行する為め今日の招宴にまのあたり久濶を叙し得ぬことを遺憾に思ふとあるのは、予もまた言はむと欲する所だ。

一酌の後庭に下りる。庭の後は直ぐ画津湖だ。紅提灯を吊した屋形船が一艘早くから用意が出来て居る。一同乗る。船は湖心に向つて徐ろに進む。四方の岸は薄暗い、静かだ、静かだ、そよとの音も無い。満天の星が澄徹の水にじつと動くこと無く映る。螢がたわたわと飛ぶ。熊本の市内の暑苦しさに比べると全く別世界だ、人々は「あゝ涼しい」と云ふ言葉をさへ忘れて居る。此時某々の二妓は絃を按じて特に肥後の古い土謡を唄ひ出した。今其一二を録さう。括弧の中の文字は舟中諸氏の註解だ。

おてもやん（人名）あんた此頃嫁入したでは無いかいな。（以上問語、以下答）嫁入したこたしたばッてん（したけれど）ごんじやどんが（夫が）ぐちやッぺちやるけん（疱面なる故）まあだ盃きやせんだッた。村役、鳶役（消防夫）肝煎どん、あんふとたちの居らすけんで（彼人達の居られるから）後はどうなッときやあなろたい。（きやあは接頭語。後の始末は何とか成るであらう。以下の語は一転して景物を叙す）きやあばたまッさん曲らうたい。（川端街の方へ曲り行かむ）ぼうぶらどんたちや（南瓜どもは）尻ふッぱッて（尻を出して）花ざあかり〳〵。

一つ山越え、も一つ山越え、あの山越えて、わたしやあんたに惚とるばい、惚とるばッてん（けれど）言はれんばい、村の若い衆が張番しとらすけん。（村の若い男が他村の男に我村の娘の子を奪はれまいと警戒して居る故に）追々彼岸も近まれば、くまんどん（熊本）の夜ぢよみよんみやありに、（夜の聴聞参り即ち説教参りに）ゆる〳〵話ばきやあ為うたい。（以下一転して女より男の容貌に焦れず、その男の豪奢な風俗意気に感ずる旨を云ふ）男振には惚れんばな、煙草入の銀金具が夫が因縁たい（以下拍子）あかちやか、ぺッちやか、ちやか〳〵ちや。

七日の月が西に落ちて更けゆく夜の涼しさ骨身に沁む頃、船は勢舞水楼に引返した。

楼上では松村氏の韓国王妃殂落当夜の懐旧談が初まる。大院君が深夜異邦の志士に護せられ王妃を刺さむとするに、悠悠冷水を引いて身を拭ひ、徐かに髪を結び、衣裳を此か彼かと撰び改め、更に天地四方の神を拜し、祖宗を祀り、而して後漸く輿に乗る、此間費すこと三時間。志士等もどかしがりて促せば、大事を挙ぐるに然か軽々なるべけむやと云ふ。之が為に予定の時間より五時間も遅れて、王城の正門に達した頃は既に白々と夜が明けた……。

夫から加藤清正談や、西南戦争談などがあつて、却々興は尽きぬが、十二時が鳴つたので一同人車をつらねて熊本に帰つた。今日人に、六七年前俳句や歌を作つた渋川石人はどうしたと聞いたら、「東京朝日」に玄耳と云ふ名で文章を書いて居るのがその石人だと分つた。

(廿) 三池炭鉱 (八月三十日)

この瞬間世界の石炭は幾億万噸か煙になる、この瞬間世界の炭鉱は幾億万噸か掘り出す、地の下に虚が出来る。この瞬間文明は進歩する、文明は石炭に正比例をして一端より他端へ進む。大観すればプルスの無限極裡はミススの無限極裡と相通ず、先へ進むは元へ戻る事である。石炭は瓦斯となつて草木の葉を養ふ、草木の解体したものが石炭ではないか。唯悲しい哉、太陽の熱が次第にさめる、大エネルギーの一部は常に放散熱となつて太虚の那辺へか逃げてしまふ。昨日は山に登つて我が地球の内部生命の一部を窺つて想像を走らせ恐い思ひをした。今日は一千尺の地下に入つて親しく埋もれたる太古の熱に触れようとする。大牟田は平地である、表面は唯の田だ、稲が青々と繁つて日の光りの中に生存を嬉んでゐる、裏面は即ち炭鉱だ、何も知らぬ炭層が暗い中に折り重つて寝てゐると、こつこつ叩くものがある、おや何だらうと長夜の眠りを覚ますと体が半分かけてゐる、動くにも体が固くなつてしまつて動けぬ、汝忍べ、汝は光耀赫奕たる新日本の文明を作るものである、と人間は遠慮なく体を削いで上へ持ち出す。斯の如くして地下は峰の巣の様に穴だらけになる。時々恐るべき爆発の犠牲をさへ具へた。一行は白仁、稲田二氏によりて坑内を見るべく案内された。上衣を脱いで雨具を着る、維新の官軍を思ひ出す陣笠の様な帽子を冠る、手に手に安全燈を持せられる、少し気味がわるい。ぞろぞろと家根のあるエレベーターに乗つた、ぢやんと知らせの鐘が鳴る、ぐいと綱を曳く、かたんと台が下りる。もう駄目だ、死は近いた、泣かうが、悶かうが、周章やうが、行くべき所へは行く、もう駄目だ、昨日阿蘇の噴火口で初て跳込んだ者の勇気をえらいなあと思ひ、その心事を憐んだ、今その心事を自ら味ふべき時が来た。初はゆるい、安心する、早くなつた、早い暗い、ふわつと体が浮く、一心に鉄棒を握る、飛ばされさうだ、ランプを気を付けよといふK生の声がする、心がぞおと縮む、訳が分らなくなる、真暗な中にごおつといふ音がし

て、台が飛んで行く、風の如く電の如く疾い、最大速度に達したかと思ふと、おやをかしい、反対に上昇して居る、やつと心が落付く、どう思つても上昇してゐる。変だ。此の状態が暫く続くと急に速さが鈍り、やはり下降してゐたのを感じた。台を降りたのは地下一千丈の所である、そこへ一分かからずに降るのだから早い筈だ。慣ると如何もないといふ、どうもない代りに初めての時感じた心の底に浸み通る一種の深い恐れを味ふ事も出来ぬだろう。実は途中で死だのだ、下へ着て蘇生したのだ。丁度仕事が休で電燈が点いて居らぬから真暗だ、中は夕立がしてゐる。ざあ〳〵激しい水の音がして、外套は濡れる、話も出来ぬ。思へば地の底に居るのだ、地獄に居るのだ、安全燈が幽に光る。案内する人に続いて五人は地獄をめぐる、ダンテの夢は実現されて眼の前にある、真の地獄といへど余り変りはあるまいと思ふ。ランプが暗いので脚下が危い、躓いたのはレールであつた。上下両側の壁を形作るは岩の如き炭層である。怖れたる心を抱いて暗いアーチの下をとぼとぼと危なげに歩いてゆく。心細い。道の端に裸の鬼どもがあぐらをかいて何事か談合してゐる、仰のけに寝てゐる奴もある。行けども〳〵尽きぬ。坑は八方へ分れる。深く進むに従ひ瓦斯の臭ひがひどくなつて来る。恐ろしい。元へ戻つてエレベーターに乗る。今度は下降する様に感じた、一千尺を一瞬に登つて日の光りを見た時、初めてほつと安心した。やはり人間の世が嬉しい、これが我々の世界だ。

(三) みやびを　(九月二日)

東京からは早く帰れと云ふ、そこへ旅費も何うやら心細く成る。折角思立つたことだが薩摩大隅に遊ぶことを断念して帰途に上る。で再び筑後の柳河に来て沖の端の北原氏宅に二泊する。柳河の事は猶次回に書く。ここでH生が同行の某生を調つた詩を作つた。

都におきて来し人と
君寝覚にも言ふは誰ぞ
われその姫に文書かむ

かくこそ書かめ—みやびをは
げにたわたわと柳にも
似て身は萎へ、阿蘇の山

五歩にひと度ふりかへり、
半町ゆきて一やすみ
「水は無きか。」と呼吸はづむ

「無かとで御座る。」かく言ひて、
兎に似たる案内者は
芒のなかを先に行く。

つづく二人の早足は、
「煙、煙。」と打見上げ
踏みこそ鳴らせ、大靴を。

靴に触れたる鈍色の
石蕗も芒もはらはらと
あたりを濁す、羅の灰。

あとに二人は足弱の
女性に似たるみやびをを
いたはりながら従ひぬ
二時すぎぬ。今見るは、
くわつと開きし地の口に
硫黄をいぶす火の地獄

渦巻く煙ほうほうと
火ひ柱なし立ちたれば
日の色黄ばみ空震ふ

「ああ。」とばかりに見驚き、
瓦斯を怖れて同勢は

みな鼻掩ひ、ものいはず。
げにもみやびを、君ひとり、
われかの姿、坑口の
熱れる石に肱しつつ、

秀句をこそ言へ、苦しげに。
「われ陰府の道、青ざめて
猶ふるさとの君を恋ふ。」

又こそ書かめ。みやびをは
君知りまさじ、折々に
ぬのこに似たる研かく

われそを聞きぬ。島原の
夜の十二時、海ばたの
橋の詰なる街の角、

奴島田に髪ゆへる
わかき女のはらからが
店を出せる理髪床、

島のならひに十二時は

いまだ宵時、みやびをは
われを引具しつと入りぬ。

象牙細工の角時計
いま戸は開き、鳩出でて
ほう、ほうと啼く、十二こゑ。

「お掛けまつせ」と椅子二つ
女ならべぬ。箔光る
鏡ながめて凭りかかる

わがみやびをを知らざれば
女はほつとその額に
西瓜食ひたる息を吹き、

くちづけの香の残るとも
もとより知らず、やわやわと
抓みゆがめて頬をば剃る

その妹は背後より、
紅き長柄の大団扇
とりてそよろと打扇ぐ。

わがみやびを快き
獣の世なるいにしへに
この時帰る大いびき。

(三) 柳河 (九月三日)

柳河は水の国だ、町の中も横も裏も四方に幅四五間の川が流れて居る。夫に真菰が青青と伸びて居る、台湾藻の花が薄紫に咲く紅白の蓮も咲く、河骨も咲く、その中を船が通る、四手網の大きなのが所々に入れられる、蜆と夕立が過ぎた後などは恰で画のやうだ。平地の水田の中にある城下だから昔はこの川が要害と灌漑と交通との用を為したのであらうが、今は後二者の用と、土地の人が自慢にする頗る美味な鰻鱔を産する所と成つて居る。此等の川には格別名も無いやうであるが、思ふに昔は此等の川全体の名が柳河で、夫が地名と成つたものであらう。又市街を置かれぬ古い時代には土民が此川に木を並べて水を塞ぎ謂ゆる簗を作つて魚を捕へた所で、柳河の当字は固より簗河であらう。

余等は美くしい夕焼の光の中に此川端を逍遙して、とある横町に曲り、名物の鰻屋で一酌した。帰途旧藩主立花伯の祖先を祀つた立花神社の裏門を入つて表門に抜けると太鼓橋が架してある。橋の下は又例の川の一つだ。岸には提灯を一つ掲げて北原氏の船が余等を迎へに来て居る。船の中には北原氏の令嬢や三男や令姪や、H生が東京から伴れて帰つた「婆

やさん」やなどが乗つて居る。橋の詰に大きな三階造の家がある。近年まで遊女屋であつたが、田舎も人智の進んだ影響で流行らなく成り、他に引越して了つた後は構造が遊女屋式だけに借る人が無いので、持主も次第に頽廃して行くに任せて置く。その一部を此夏借受けて氷店を開いた者がある。二階と三階との川に臨んで柳河の旧城を見渡す方に計り紅提灯が少し点いて居る。客は一人も無い様子、森として音もせぬ中に紅提灯が揺いで居るのが寂しい。船中の女連は何か買物をすると云ふので町の方へ行つた、H、I、R三生も買物をしに其後から行つた。M生とK生とは橋の上に涼んで居たが、頻に渇を覚えるので此怪しい氷店に入る、門を入ると玄関の前の松蔭で裸の大男が氷の道具を控へて床几に腰を掛けて居る。此処で飲まうと云ふと是非三階へ上れと云ふ。暗い、高い、みしみしと鳴る虫蝕ひの梯子段の気味の悪さ、深い暗い座敷と云ふ座敷からは、冷い黴と湿気と、埃の匂ひの交つた風が密と吹く。手探りに踏締め〳〵上ると三階に出た。光景が一変する。卓や椅子が並べてある。中々眺望が佳い、紅提灯を静かに動かす風が頗る涼しい。少年が一人居て用を聴く。欄干に立つて松蔭の先の男に伝へると、暫くして下から相図の声が掛る、きり、きりと鳴る音が三階の檐にするかと思ふと、氷の硝杯を載せた岡持が二階の屋根を越えて空中を登つて来る、少年は夫を欄干の所で受取る。両人が空中飛来の氷水を珍しがつて喫して居ると、皆が川の向ふ岸を帰つて来る。「おうい」と三階から呼ぶ。皆がきやつきやつと云つて気味の悪い梯子段を上つて来た、俄かに此怪しい大きい家の三階の一角が賑ふ、頻にきりきりと、檐から下へ掛け渡した索が鳴る。

楼を下りると月が雲を漏れた。二人の船頭が棹をさす、船は余等を載せて真菰の中に入つた。蓮の花、蓮の葉、真菰、水藻、台湾藻などがしめやかに香り合ふ、鈴虫が啼く、どこかに水鳥の羽音と啼く声がする。「婆やさん」は用意の西瓜を切る、菓子を出す、茶を入れる。ラムネを抜く、皆は静かに語る。

此時岸の上を多勢沈んだ哀れな声で歌つて来る者がある、月の光に透して見ると唯だ一列の白い雲が歌つて来る、漸く近づくと女づれだ、白衣の女づれだ。筑前筑後の風俗では良家の処女が組を作つて西国の巡礼に出る。白い麻衣を着けて菅笠を被り、水色の脚絆、赤い緒の草履に後掛をして、詠歌を流し乍ら歩く。信心からでもあるが、此の巡礼に出ぬ女は縁が無いと云ふので其為めにも必ず出る。余等は此の面白い水の国の月夜に此のうら若き信女の殊勝な行装を見て覚えず敬虔の念を生じた。

船が北原氏の土蔵の裏手に着いたのは十時であつた。今夜は年に一度盆の月の観音講と云ふので、町内の処女は皆定つた一軒の家に集つて、店頭に壇を設け、曽てその母なり姉なりが率仕した如く、譲られたる古き観音像を祭つて、燈明や

供物や花やを捧げて、参詣に来る老若に一々供物の菓子を頒つて居る。是も殊勝な風俗だ。

㈥ 徳　山　（九月五日）

H生は暫く柳河に留る、B生は京都まで直行する、あとの三人の無関心組は周防の徳山に下車した。徳山はさまで賑かな街では無い、近年海岸に出来た海軍の煉炭所が唯一の命だ、その職員や職工が居るので少し許り呼吸をつく。毛利家の支藩の旧地だと云つても、児玉源太郎と島田蕃根と本願寺の宿老赤松連城と以外に格別人物も出て居ないらしい。K生が会て此地に居つた頃には大阪馬関間を航海する汽船が日に一度は寄港したものだが、山陽鉄道が馬関まで開通して後は其事が一切無く成つた、で海岸街には人通も無い位だ。海に沿ふた那智の松原は曾て景色も佳く又恰好な海水浴地であつたが、今は煉炭場の粉炭が山の如く積まれて其上へ濛々と煤煙が渦巻く。海には海軍用の団平船を繋ぐために新に築かれた防波堤が突出して居る。併し屏風の如く島で取囲まれた入海の景色は相変らず此地の人が誇るべきものだ。

K生の令兄が住職して居る徳応寺に宿る。明け放した御堂の中、如来様を正面にして経机や一切経の飾つてある前で、極めて不信心なる三人は胡坐をかいて般若湯を頂戴する。向ひ側には住職の外に伊藤、岩城の二僧、住職の細君が坐られる。その後には今年京都の大学に入学する長男智城氏以下令息令嬢が五六人づらりと並ぶ。そこへ御寺に附属した徳山女学校の卒業生数人が配膳給仕の役をする。杯を受けるにも差すにも一々小笠原式の御辞儀がある。御馳走が又、是は寺院に属した農園のトマト、是も農園のキャベツ、是も農園の卵、農園の芋、農園の蓮の蓮飯と、一々住職の鄭重な挨拶、三人は「はゝあ、是も農園ので、是れも、はゝあ」と一々答礼に及んで而して後沈吟傾首しながら箸を執る。「何も田舎は御馳走は無いが、唯だ酒以外の品は一切農園で出来たと云ふのが御馳走で……」と住職は猶は「農園」を繰り返へす。三人は「はい、誠に」と軽く頷づく。早稲田の英文科を出たと云ふ岩城師は「さう被仰らいでも御院主さん、トマトやキャベツは東京に見事なのが一杯ありますがな」と挿む「地方に到る処農園の出来ますのは結構で、筑後柳河の立花伯の農園なども却々立派でした、富豪とか御寺様とか貴族とかの御慰みには是が一等です、趣味もあり、実用にも成り、又地方人の知識啓発にも成りますから」とM生は話を側へ逸らさうとする。K生もすかさず「東京には良い農園も沢山ありますが、兄さん、一度御上りに成つては何うです」と云ふ「いや、此方から上るには及ばんで、近頃は大分大学者の方々が招待に応じて来て下さる、先月も井上哲次郎博士と福来博士とを御招待したが、中々有益な説を聞かせて下さつた」と住職の挨拶だ。「如何にも大分に学者が下りますな、此間平戸では松浦伯の令息が某文学士を連れて帰つて講演をさせて居ました

し、長崎では建部博士の演説があつたし、熊本では那珂博士、筑後ではユニテリヤンの広井辰太郎、福岡では福来博士などの講演があるやうでした」とM生が話す。此の晩餐の席の光景と問答とは却々奇観だが、I生とM生は、余程窮屈相だから、K生は気を利かして海岸へでも散歩しようと云ふ。岩城師云く「月が佳いし海も静かですから船を泛べませう。」

月光　（九月六日）

色も無い、香も音も無い、光も無い、影も無い、固より心も情も無い、空かと云へば虚の空で無い、空の充実した空だ、真空の世界だ。と思ふと、何処からとも無くひたひたと云ふ幽かな音がする、瞬く間に音が拡がる、真空の世界がすべて幽かに震へる幾千万億とも数へきれぬ小さなひたひたと云ふ音が集まつて、大きなひたひたと云ふ音を作る。突然、張りつめた真空の世界が針の先で突いた程裂けた。

「誰ぞ、そこに蠕動き居るは。」

と、初めて生物の声がする。声のする辺には無数の星が散り乱れる。

「盲なる我はあみいいば。

然か問ふはまた誰ぞ、汝。」

と答へた物がある。先の声はまた歌ふ。

「夜光虫、身はすべて眼ぞ、

われは見む、汝は触れよ。」

ひたひたと云ふ音は依然として脉打つ如くに流れる。音のする中を無数の夜光虫が歌ひながら泳ぎ廻る。泳ぎ廻る処に白い光と色とが出来た、白い色を取捲いて初めて混沌たる黒い色が生じた。あみいいばは前へも進まず後へも退かずに、唯だ妙な身振をして跳つて居る。そこへ又一つ玲瓏たる単細胞がふわふわと流れて来て、瞬く間に円く脹れる、恐ろしく白い色に成る。

「ただよはめ、潮のまにまに、

海月の身、何か思はむ。」

海月も手を振り足を振つて躍る。自分は癡と細目に此光景に見入つた。ひたひたと自分の四方にも幽かな音がする、青い潮の匂ひがぱッと自分に散り掛かる、自分は、我は何であらうかと気が附いて顧みると、波間に映つた一痕の月であつた。

「まだ御目が覚めませんか。」

と揺り動かす人がある。伊藤師だ。K生の夢は覚めた。

船は今煉炭場の防波堤の内側を漕いで居る。聞けば予は三時間も船中に酔ひ倒れて寝たのだ、其間にI生もM生も智城も伊藤、岩城二師も月光の海に遊泳を行つたのだ相だ。予は寝込んだのですつかり酔ひが覚めた。油を流したやうに静かな徳山の海の夜景色を十四五年振に眺めたのであるが、黒髪山は旧の如くに青い、月色はいつ見ても人に親しい、予の境遇は変つたにせよ、予の心は相変らず自然と共に随処に若い。

夜が更た、白露江に横はるとも云はうか、少し涼し過ぎる、帰らうと皆が云ふ。船を旧波止場に引返す途中で頻りに宗教談が出た。伊藤師は二三年前東京に在つて、巣鴨の大日堂で「無我愛」を唱へ、一部の熱心な求道者を吸引した、有名な伊藤証信師其人である。一旦大に感ずる所あり、彼の大声疾呼を止めて以後は、予が阿兄の招請に応じて此周防に来り、徳応寺附属の女学校に教鞭を執る傍、慇ろに信者を教化して居られる。一見温厚な風骨の中に何処と無く感情の激しい処が窺はれる。予が曽て雑誌「無我愛」を読んで想像して居た所に違はぬ人だ。師が阿弥陀の他力に帰して更に阿弥陀の慈悲を行ふと云ふも、綱島梁川氏が神子の自覚と云ふも、詮ずる所、色や形こそ異れ、ひとしく感情の土台に咲いた花だ、如此き宗教は二氏の如き感情的な人柄に向つて初めて能く効果もあるが、智識と感情との併せて均等に発達した人柄を満足せしむるには足ら無い。余は二氏の信仰を破壊せむとする者で無く、固より十分の敬意を払ふ者であり、又人間の機根は種々であるから、真宗や基督教の他力門が未来永世相応の勢力を保つことを信じて疑はぬ者であるが、実証上、余の如き者には到底他力門で安心自得の出来難かつたことを云ふのである。余は又常に思ふ、宗教家と宗教の自覚者とは同一で無い、宗教家は必ず自覚者たるを要するが、自覚者は皆必ずしも宗教家だとは云はれぬ。宗教家は宗教家たるべき諸種の資格を具備するを要す、自覚を得た許で無く、相好、徳望、弁舌、智慧、感情、意思、才気、是等の条件が円満に備らずして、他を感動し帰服せしめやうとするのは至難だ。釈迦、基督、親鸞の如き全人格の完備した、謂ゆる宗教的天才にして、初めて宗教家と自負すべきであるが、法器に非ずして法を説くのは却つて法を瀆すものだ。伊藤師が顧慮する処なく往年の花々しい伝道運動を断念して、地方女学校の教師に身をやつし、偶ま求めて来り問ふ田夫野人あれば、自家の信仰を披瀝して其等の人々が得信の助縁たらしめる為めに醇々説いて倦まざる今日の態度は、頗る自家を知るに明かなことだ、余は深く師に対して畏敬の念を生じた。

月は余等を送つて徳応寺の後楼の蚊帳の中に眠らしめた。

(三)　西　京　(九月七日)

京都まで帰つて来た。K生の故郷だし、他二生の曽遊の地でもある、なつかしい母親の懐に入る心地がする。我等の詩社の同人が定宿である三本樹の「御愛さん」方に宿る、御愛さんは娘さんの名で、宿の名は信楽。三本樹と云へば昔も今も京都通の喜ぶ街だ、寂れて居るから静かだ、其が第一京都らしくて佳い。山陽の詩などで名高い月波楼と水明楼は信楽の両隣に当つて、料理屋と旅館とを兼ねて居る。二楼とも大分に当世化したやうだが、中に挟まれた信楽だけは依然として純京都式の旅屋を改めない。七十に近い祖母さんと、娘の御愛さんと、女中との、小勢な女世帯で質素に稼業を遣つて

行く。少しもハイカラじみた点が無い、万事に古風な匂ひがする。泊る客は皆先代からの馴染客か、その紹介で来る者ばかり、勿論三本樹の旅屋に紹介の無い生面の客を泊める家は無い、去年だつたか、某大将が突然この信楽に車を着けて玄関に立つと、女中が一見の御客様だと見て、唯今座敷が塞つて居ると云つて謝絶した。大将は其れと悟つて「おうい、祖母さんは居らぬか、私ぢや」と高く呼はつた。出て来た祖母さんは二十余年振に来た大将の顔に見覚えがあつたので「まあ、まあ、これは御珍しい」と奥へ通した。大将は危く門前払ひを逃れ奥へ通つて見ると、森として何の座敷にも客は無かつたさうだ。

余等を出迎へた御愛さんは、去年より大層夏瘦をして居る。

奥の離亭の簾を捲くと、下は直ぐちよろちよろと加茂川の流、左には糺の森、右には丸太橋を越えて三条の大橋、正面には如意ヶ嶽、吉田山、黒谷の塔が見える。比叡山を初め東山三十六峯は一望の中の緑だ。

歴史は此古い都の上を幻の如くに過ぎて了つた。縦に残香を留めた老いたる麗人の姿にも似て居ると思ひ乍ら眺めて居る中に、夕闇が次第に濃く成つて来て、山の姿が薄れてゆく、知恩院の鐘が鳴る、橋を渡る車の響が却つて四辺の静けさを増さしめる。河原ではきれ〳〵な蟋蟀の声と絶間なき水の音とが妙に相和して、旧都の悲哀を歌つて居る。千年前の金泥の香をもたらして風は涼しく短簫を吹く、寂しさは骨の髄まで沁み透る。

浴後門を出でて足に任せて歩む。月が淡く屋の上に匂ふて、秋のやうに快い晩だ。M生はテオドル、ストルムの詩を歌ふ。

けふのみぞ、けふのみぞ、
かくわれはうつくしき。
あけむひは、あけむひは、
ものなべてきえゆかむ。
ひとときよ、このときよ、
きみこそはわがみにしあれ。
さだめかな、しぬべしと、
しぬべしと——われひとり。

我等若き者は今日の歓楽に耽つて明日の悲哀を思はず、一日一日を美くしく過したいと望む。これが又実に若き日の誇だ。

灯の輝く街を幾つか過ぎた。流るるやうな人々と袖すり交して、京極を通り、先斗町を抜けて四条の大橋に出る。河原の納涼は橋より上に限られて昔ほど盛でも無く、又随分俗化して当年のしめやかさを幾分没了したにせよ、古い京の風俗の俤は残つて居る。橋を渡つて祇園に入つた。

舞姫は夢の女である。過ぎし夜の夢の中で捉へようとして捉へ難き美しい女を見た時の思は、やがて眼のあたり舞姫を眺めた時の思に似通つて居る。黒髪の匂ひが七重に自分を巻いて、美くしい幾匹の蜘蛛の少女がひらひらと五色の絲を散

す。我は魔薬に酔つて居るのではあるまいかと、温かい恐怖を覚えた時、初めて祇園に在つて舞姫に取囲まれて居る事を知つた。一人の舞姫はよく語る。お妻八郎兵衛から油屋お紺になり、北野の天神祭から黒谷の十夜になる。長い袂を膝の上に重ねて、その上で赤い扇を弄ぶ。笑ふたびに臀がゆれる。綺麗な声が見えぬからと灯を前に廻すと、扇で顔を半掩ふて「おゝ、はれがましや」と笑ふ。人形の美だ、人形が物を言ふのだ。舞をと望む。人形が立ちて舞ひ出す。帯の揺ぐのも、袂のなびくのも、裾の流れるのも、扇の翻へるのも、すべて線が長閑に円い、全くの調子が韻文的だ。春雨一曲、所作は短いが我等の感興は長い。

(三) 京の朝 (九月八日)

鐘が鳴る。K生が、あれは黒谷の鐘だ、又鳴る、今のは知恩院のだと云ふ。水に近い二階の座敷には河原の蓬の香が戸の隙から露に濡れてしつとりと匂ふ。千鳥が遠く又近く啼く。川向ひを通る荷車の音がころころと響く。どこかで工場の瀉笛が其れさへ京化して悠長に鳴る。余等は起きて戸を明けた、山々には夜来の雲がまだ目を覚さずに寝て居る。雲の上に額を出した山は何れも広重の絵に能くある群青色だ、久振に此様な冴えた山の色を見て渇した者が水を得た心地がする。M生は顔も洗はずに早写生帳に向ふ。川向ふを荷車と前後して薪を載いた大原女、花を載いた白河女が通る。清々しい朝だ。裏から下りて河原の流で口を漱ぐ、体を拭く。終つて離亭へ帰ると膳が並ぶ、御愛さんが給仕をして呉れた。

I生は此朝の心地よさに、作りさした手帳の詩を仕上げる。詩は長崎の遊廓稲佐の街を日中に通過した時の写実だ。此紀行には「長崎」の条を書くべきK生が懶けた為めに今まで書かずに置いたが、稲佐は長崎港の対岸の街で、久しい間露国の水兵を専ら華客とする遊廓であつた。某国の参謀本部は少からず之に由つて敵国の軍事機密を知り得たと云ふ事だ。其れが日露戦争以来露国の軍艦は一艘も来なく成つたので甚しく寂寞を極めて居る。今は日本人のみを客にして居るが、長崎の方に円山の遊廓があるから此処まで足を運ぶ物好きは少ない、稲佐は益々さびれて行く。遊女屋が氷店に転業するものもあり、廃業するものもある。唯だ遊女屋は勿論、銘酒屋も、煙草屋も、洗濯屋も、郵便局もすべて露西亜文字で書いた看板の残つて居るのが戦争前の賑はひを想像せしめるに過ぎない。江戸の仇を長崎で討つので無くて、I生の此詩は長崎の火を京で吹くものだ。

乾きはてたる無花果の
葉こそは喘げ。暑き日の
稲佐の土は眠りたる。

懶げなりや、肉桂の
香ぞ満ちけらし、窓すべて

閉ぢたるままの廂やかに。
脂のにほひ何処より
洩るるか、分かず、黒髪の
香にまじはりて漂ひぬ。

ものうし、昼は稍くだつ。
をりから、遠くかすかにも
海をよろこぶ水夫の声。

さてしもあはれ、街の角、
乾魚ひさぐと坐りたる
翁も低くつぶやくよ。

いま歪みたる鋪石を
赤き蟻匍ふ。かたはらに
口蠟燭の燃えのこり。

かくて懶し、更にまた
風こそ沈め、白楊の
壁にたふるる幹の影。

その葉を分けて清げなる
少女いできぬ、水甕も
ましろき衣も、ぬれ髪も、

浮ぶと見つれ。やがて疾く
小走り過ぎつ。なつかしき
水の香のみぞ零れぬる。

されど、ものうし、夏の街、
しばし淫の曲絶えて
蒼蠅も鈍くたちまよふ

ひとり著きは屋根の上
「夢売る家」と掲げたる
赤招牌の露西亜文字。

(六) 京の山 (九月九日)

車で二条の停車場へ駈け附ける。滊車は恰も出でむとして居る。同行の武田夫人が改札口に走り寄つて「滊車を出すのを待つてお呉れやす、今切符を買ふて居やはりますさかい」と声を掛ける。滊車は笛を鳴らした後だが凝と待つて呉れる。どこまでも京都は呑気だ。

嵯峨に着いた。「花よりだんご」の店に憩ふ。嵯峨鉄道が私線の時分には煙火などを掲げて納涼客の為めに特別列車を

出したが、官線に成つてからは何の催しも無いので嵐山の夏は寂しいと店の主婦が語る。

渡月橋を渡る。河鹿が微かに啼く。日かげは赫と橋上の我等を照す、汗がたらたら流れる。併し山間の千鳥が淵の辺は青く曇つて居る。涼しさうだ。いつ見ても嵐山の眺めは此橋の上に限ると思ふ。橋を渡つて右に折れると、茶店がある、貸船が五六艘繋いである、路は水に沿ふて山陰を上る。頓に涼しい風が吹く。川を隔てて亀尾山の女松の木立が実に佳い、その下を屋形船が一艘しづかに上る。ぎい、ぎいと云ふ櫓の音が山に響く。中の客は上から見える由も無いが「夢」を載せて遠い遠い国から来た船のやうな感じがする。温泉宿の手前から左折して更に山に登る。路は大悲閣の門で絶えた。

大悲閣の懸崖に突き出した楼上、遙かに京の市街や東山を望んで語る。下から吹上げる川風に、浴衣の袖は羽が生へたやうに翻へる。小僧さんが渋茶を注いで呉れた。我等は備へてある四角な木の枕をして一時間許り午睡をした。余り涼しいので嚏をして眼が覚める。山を下りて「花よりだんご」に来たら午後一時だ。ここで午餐を済ませて二時半の嵐車で京に帰る。二条で武田夫人に別れて、我等は薄田泣菫氏を上京の下長者町室町西へ入る所に訪ねた。氏は病後だと聞いて居つた割に元気さうに見える。新夫人をも紹介された。氏の談話中、「暫らく作らずに居ると何とか世間では云ふが、僕は二年や三年詩を作らずに居つても可いと思ふ」と云はれた。併し氏は此秋に入つて続々新作を出されるさうだ。話は尽きないが、今夜の嵐車で東京に帰る都合があるので匆々と辞し去つた。

午後四時信楽を立つて四条通で買物をする。東山の大谷にK生は両親の墓参をした。一同それに附合つて大谷から清水へ出る。舞台から望んだ入日が佳かつた。暮方の薄暗い中で、白い衣を着て御禊をしながら滝に打たれて居る二人の行者を見たのは何となく神々しかつた。清水坂で人形を買ふ。祇園神社へ来たら真暗に暮れた。社殿の燈明がぼんやり籠を洩れて青白く匂ふ前に舞妓の番が二つ並ぶ、その上に鈴がちやらんちやらんと鳴つた。趣が古いけれども気持がいゝ。祇園新地の写真屋で舞妓の絵葉書をI生とM生が買ふ。店の女云く、「舞妓はんのは何れも一枚十五銭とす、是が大変東京の御客さんに売れますのどすえ、芸妓はんの方は廉おす、一枚十銭どす。」

四条川端の武田氏宅で晩餐の馳走を受けた。河原の納涼の灯は夜の霧に映じて朱をぼかして居る。洋画家中沢弘光氏得意の画境だと思つた。

(六) 彗　星　(九月十日)

月は曇つて居る。併し四条の辺の燈の帯は又今宵の歓楽を約する様に、にこやかに青柳の間から笑ひ掛ける。呪はれた渡り鳥よと人は見るであらう、我等は此聯さを後にして暗き

野にゆく滊車にと急いでゐる。四条で雇つた車は、一輛は合乗りであつた。I、Mの二生は珍奇に驚いた観照の眼をまだ落ち付かす隙もないうち、車はもう動き出した。車はがらがらと河に沿ふて走る。柳が尽きると又燈のあかい宮川町になつた、燈が尽きると塀となつた……京都の夜は段々寂しくなる。I生は定かならぬ眸に後を見返り乍ら「京都は併し物足りぬ都だ」と言つた。だが聽て五条に出た。少し又燈があかるくなつた。堅気に明るくなつた。鳥渡車を下りて寺町を西へ入る店に京扇を買ふ。「源氏明石」「入相に帰雁」「雨のふる日」など、こんな模様のいろいろを選んでゐると、自分はゆくりなくも「草の雨祭の車過ぎてのち」といふ句を思ひ出して心もすずろになつた。五条の扇屋はもう「追憶」の戦ぎを売り始めてゐると見える。夫れから又車に揺られて七条の停車場に達したときは、惘然として何事も弁ぜられなかつた。時に態々予等を送つて来て呉れられた蒔田氏と其夫人とに会つて我に返つた。発車には間があつた。M生は室隅にしきりと蒔田氏と物語つてゐる。

又荷物の生活をしなければならないのか、天地覆戦の間を狭ましとする人間の諸々の需要を負ふて此僅か半間の椅子に坐らねばならぬのか、予は迸て焼くに物なき憤懣の情に充たされた。「寝るに限る」といふものがある。予等も此経験深き言葉に従がはねばならなんだ。可成広く席を取つて少時まどろむ。幾時間経つたか知らぬ。自分ははつと驚いた。そして本能的に立ち上らうとした。だがその前に「いや待て、停車場だな、人が来るぞ、いま眠つてゐる風をしないと損だぞ。」と考へ直した。予は正直だつた。併し世間は自分をして恁んな論理に恥羞を感ぜしめぬ様に自分を仕込んだ。で半ば意識的に、半ば無意識に目を閉ぢてゐると、やさしい——黄ろい、碧い糸が乱れるやうな——避暑地の停車場によく聞くやうな訣別の辞が聞えてくる。蚕によう似た好奇心はそと首をあげて「どうやら外の方が面白さうだぞ、起きて見ようかな」なんて考へる。「寝てゐた方が可いや」と叱る。と耳許で「やしよめ、やしよめ」といふ声がする。所へ懇ろに自分を揺り動すものがある。結局仕方がなくて起き上つた。自分を起したのは温厚な顔をした夏服の巡査であつた。之から後は遂に眠られなかつた。これも同様に眠られぬ傍のI生と出来る丈この時から価値を発見しようとした。車内の凡ての象を黙検した。時に「あら彗星」と叫ぶものがあつた。刹那車の内の眼が悉く月見草のやうに開いた。狭い窓は一時に三四個宛の首を吐き出したのである。

彗星は東の空、地平線上一尋許りの所に懸つてゐた。尾は鋭く天心に向つて流れる。恰もサタンが堕落する姿である。或は大なるメドウオザの首が蹤々として虚空を駆るとも想像される。独逸語では彗星は又髪星とかいふそうだ。青に燃えたる炭化水素の二万里の髪とは面白い。

黎明蹌踉き乍ら食堂に入つて、得意気に車内の彗星を説く

I生に左の詩を示した。

夜はほのぼのの浜名湖の
さらめきに明く。悔恨と
渇望に喘ぐイキシオン、
わが氣車こそははたはたと

鉄路を軋れ、食堂は
朝餉の用意ととのはず
はた入りにたる少人の
二人に覚めず、夜の夢

蕊のうちゆとり出す
キユラソオの酒、そを飲まば
花ぞ開かむ、回想の——
一人は杯に口つけて

「あな、美し、やんれ、黄道の
十二の宮ゆぬけいでて
東に落つる彗星よ、
守護の御神よ、われぞ追ふ
青に消えゆく髪の香を。」

はたや一人はゑわらひて
さと翻へす——欄干の
灯に似る京の君が像を。

いま乱噪に食堂車
鳴りこそゆらげ、憂し、氣車は
はためきやめず、現実の
国に急ぎぬ——日のぼりぬ。

翌日の昼前東京に着いた。此記は之で終る。